

兵庫縣文化財調查報告 第23冊

龍子長山1号墳

—山陽自動車道關係埋藏文化財調查報告 II—

1984.3

兵庫縣教育委員會

兵庫縣文化財調査報告 第23冊

龍子長山1号墳

—山陽自動車道関係埋藏文化財調査報告 Ⅱ—

1984.3

兵庫縣教育委員會



古墳時代の土器



石室再利用時の土器

例 言

1. 本書は、龍野市揖西町龍子^{いつさい りゆうこ ながやま}長山、龍野市揖西町南山字向イ山に所在する龍子長山1号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理調査は、日本道路公団の委託を受けて兵庫県教育委員会が実施した。調査は、昭和57年8月23日から昭和58年1月10日までの計45日間を費した。
3. 調査は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、社会教育・文化財課技術職員渡辺 昇・村上賢治が担当した。
4. 遺構写真は、調査員が撮影した。ただし、航空写真は日本産業航空株式会社ならびに国際航業株式会社に依頼した。またラジコンヘリによる上空写真は岡田克巳氏に撮影して戴いた。
5. 本書で示す標高値は、日本道路公団設定のB.M.を使用した標高値で、方位は磁北である。
6. 整理作業は、魚住分館ならびに山陽自動道現場事務所、渡辺・市橋重喜・村上が実施した。
7. 遺物の写真は、土器については森 昭氏に依頼し、撮影して戴いた。
8. 執筆は、本文目次に示した通りで、編集は渡辺が主担した。
9. 本報告にかかる遺物およびスライドなどの資料は、現在兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下630-1）に保管している。
10. 現地調査・整理調査に際し、多くの方々に御教示・御協力を戴いた。御芳名を記して、謝意を表する次第である。

松本正信、加藤史郎、大村敬通、吉田昇、志水豊章、森内秀造、水口富夫、市村高根、種定淳介、永井信弘、石本品義



龍野市の位置

本文目次

例 言

I はじめに	(渡辺)	1
1. 調査に至る経緯		
2. 調査の組織		
3. 調査日誌抄		
II 位置と環境	(渡辺)	7
III 調査結果	(渡辺)	11
1. 古墳の位置		11
2. 外 形		11
3. 墳丘築成		16
4. 横穴式石室		18
5. 遺物の出土状態		22
6. 石室の再利用		24
IV 遺 物		
1. 古墳時代の遺物		
(1) 土 器	(村上)	25
(2) 鉄 器	(渡辺)	29
(3) 耳 環	(渡辺)	30
2. 石室再利用時の遺物	(市橋)	31
V 龍子長山2号墳の測量調査	(小林)	41
VI ま と め		
1. 古墳の位置づけ	(渡辺)	46
2. 古墳時代の土器について	(村上)	51
3. 石室再利用時の遺物について	(市橋)	54
VII おわ り に	(渡辺)	56

挿 図 目 次

第1図	古墳から見た西方向	4
第2図	伐採風景	4
第3図	石室堆積状況	5
第4図	調査風景	5
第5図	調査に参加した人達	6
第6図	ラジコンヘリによる写真撮影	6
第7図	調査風景	6
第8図	石室全景	6
第9図	揖保川の源、大身谷	7
第10図	揖保川・林田川合流点(有紋之淵)	7
第11図	龍子長山1号墳の位置と周辺の遺跡	8
第12図	美奈志川(中垣内川)	9
第13図	中垣内1号墳	9
第14図	佐江照円寺石棺	10
第15図	龍子長山1号墳の位置	12
第16図	試掘溝配置図	13
第17図	地形測量図	14
第18図	墳丘測量図	15
第19図	南北畦畔土層断面図	16
第20図	墳丘および石室内土層断面図	17
第21図	石室実測図	折込み
第22図	古墳時代遺物出土状態	21
第23図	石室再利用時遺物出土状態	23
第24図	土器実測図 (1)	26
第25図	" (2)	27
第26図	" (3)	28
第27図	鉄器実測図 (1)	29
第28図	" (2)	30
第29図	耳環実測図	31
第30図	石室再利用時の遺物 (1)	32
第31図	" (2)	33
第32図	" (3)	34

第33図	龍子長山2号墳墳丘(開口部)	14
第34図	" (奥壁側)	14
第35図	龍子長山2号墳地形測量図	42
第36図	龍子長山2号墳石室実測図	折込み
第37図	龍子長山2号墳石室(奥壁)	45
第38図	" 石室(玄門)	45
第39図	双口壺復原図	51
第40図	丁古墳群の双口壺	52

表 目 次

第1表	古墳時代鉄器観察表	35
第2表	耳環観察表	35
第3表	古墳時代土器観察表 (1)	36
第4表	" (2)	37
第5表	" (3)	38
第6表	" (4)	39
第7表	石室再利用時土器観察表	40

図 版 目 次

巻頭図版	上 古墳時代の土器
	下 石室再利用時の土器
図版 1	上 揖西平野と古墳遠景(北東から)
	下 同 上 (北から)
図版 2	上 古墳全景(調査前)
	下 石室全景
図版 3	石室全景
図版 4	左上 土層堆積状況
	左下 墳丘断面
	右上 墳丘断面
	右下 墓壇埋土
図版 5	上 航空写真
	下 古墳遠景

- | | | |
|-------|---|-------------------------|
| 図版 6 | 上 | 古墳遠景(南西から) |
| | 下 | 古墳遠景(北東から) |
| 図版 7 | 上 | 古墳遠景(北西から) |
| | 下 | 古墳遠景(西から) |
| 図版 8 | 上 | 古墳全景(調査前) |
| | 下 | 石室再利用面全景 |
| 図版 9 | 上 | 石室再利用面遺物出土状態 |
| | 下 | 同 上 |
| 図版 10 | | 石室全景(約 $\frac{1}{60}$) |
| 図版 11 | 右 | 石室全景 |
| | 左 | 玄室全景 |
| 図版 12 | 上 | 石室全景 |
| | 下 | 同 上 |
| 図版 13 | 上 | 左(北)側壁 |
| | 下 | 右(南)側壁 |
| 図版 14 | 上 | 奥壁 |
| | 下 | 遺物出土状態 |
| 図版 15 | 上 | 遺物出土状態 |
| | 下 | 同 上 |
| 図版 16 | 上 | 石室全景 |
| | 下 | 同 上 |
| 図版 17 | 上 | 石室全景 |
| | 下 | 墓竈の裏込め状況 |
| 図版 18 | | 古墳時代出土土器 |
| 図版 19 | | 古墳時代出土土器 |
| 図版 20 | | 古墳時代出土土器 |
| 図版 21 | | 古墳時代出土土器 鉄器 |
| 図版 22 | 上 | 古墳時代出土鉄器 |
| | 下 | 古墳時代出土耳環 |
| 図版 23 | | 石室再利用時出土土器 |
| 図版 24 | | 石室再利用時出土土器 |

I はじめに

1. 調査に至る経緯

山陽自動車道は、吹田市を起点とし西宮市で中国縦貫自動車道と分かれ、徐々に南に下がりながら西進し姫路市・龍野市を経て、岡山県から山口市に至る総延長約430kmの高速道路である。昭和46年に基本計画が決定されて以来、今年度に至るまで計画は進捗している。昭和57年3月には、龍野西～備前インターチェンジ間25.3kmが供用を開始した。龍野西インター以東も引き続き東進の計画が鋭意進められつつある。

昭和46年に基本計画が練られてから、幅広い範囲で分布調査も実施された。龍野市域は上田哲也氏を中心に分布調査が行われた。ルート決定のための分布調査は、基本計画がなされた昭和46年度に、ルート決定後の詳細分布調査は昭和50年度に行われ、その間も協議が何度となく重ねられている。また、随時兵庫県教育委員会も部分的に分布調査を実施している。分布調査結果ごとに協議を重ねられ、またその間に路線の伏採も行われ、地元研究者による分布調査も行われ、新たに確認された龍子向イ山古墳群（当時は龍子群集墳）など遺跡数は増加した。

遺跡の発掘調査は、昭和53年度の相生市ツブレ池古墳・龍野市南山散布地・龍野市と揖保川町にまたがる片島古墳の確認調査を皮切りに赤穂市堂山遺跡確認調査へと引きつがれ、昭和54年度には、堂山遺跡と相生市・緑ヶ丘古宮址群の全面調査が実施された。昭和55年度は、片島古墳、片島遺跡、緑ヶ丘古宮址群、龍野市大陣原古宮址群の全面調査と南山散布地、姫路市鷹ノ子池遺跡、揖保川町・笹田古墳の確認調査が実施され、調査は本格化した。昭和56年度は、年度当初に笹田古墳の調査を行って、龍野西以西の調査を終了した。

昭和57年度も前年度までの調査に続いて龍野西インター以東の調査を実施することになり、兵庫県教育委員会は2パーティ(4人)を投入し調査を行った。4月20日から調査を開始した。その一環として、龍子長山1号墳も発掘調査を行った。調査は、昭和57年8月23日の伏採作業から手掛け、龍子向イ山古墳群と調査期間を重複しながら霜の降る翌1月10日の実測作業までの延45日間を費した。

龍子長山1号墳は、昭和50年度兵庫県教育委員会が作成した「山陽自動車道遺跡分布調査報告」にすでに「No. 20 南山古墳」として登録されている。その後、昭和57年度契約から発掘調査時まで横穴式石室を主体部とする円墳である「南山古墳」として呼称されていた。調査が進捗したところで、古墳は大半が大宇龍子に位置しており龍子制に開口しているなど、併行して調査を進めてきた龍子向イ山古墳群と有機的に強く結びついているものと考え、山の名称であり小字名でもある長山に大字名である龍子を冠し、「龍子長山1号墳」と称することにした。最近刊行された「全国遺跡地図28兵庫県」（昭和57年5月刊）をはじめ公刊された遺跡分布地図には記載されていない。ただ、龍野市から刊行された「長尾タイ山古墳群」では、龍子向イ

山と龍子長山向古墳群を包括して龍子古墳群と呼称している。同じく「龍野市史」第一巻の挿図の養久山墳墓群分布図中にもドットが落されている。本文で明確な記述はないものの共に三ツ塚山塊の古墳として、龍子向イ山と龍子長山は同質の扱いをしているものと思われる。

調査は、古墳1基の全面調査と尾根上及び斜面の確認調査を実施した。尾根上は、土塚墓などの小規模な墓の存在の可能性を求めて調査対象とした。尾根最頂部は、古墳もしくは前代に遡る墳丘墓の確認のため行った。丘陵斜面は、東方の龍子向イ山遺跡、西方の片島遺跡と同様の弥生集落の可能性を求めて試掘溝を設定した。確認調査はトレンチ調査で、2m幅のトレンチを延105m面積にして210㎡調査した結果、遺構など認められず自然地形と考えられ、遺物包含層も確認されなかった。そのため、龍子長山1号墳の古墳1基の全面調査だけとなった。

調査は、路線内は当然全面調査を行ったが、路線外も一部調査を実施した。墳相を明らかにするため、調査を快諾された山本 哲氏に感謝致します。また、前田英作氏にも用地外への掘土の流入など承諾され調査にも協力戴いたことを明記し、深謝致します。

調査中から、出土遺物の洗浄・註記作業を行い、復原・検査・実測作業も現地説明会にも関係して随時行った。昭和57年度発掘調査終了後、魚住分館で一部整理作業を実施したが、本格的には翌58年度行った。山陽道現場事務所を中心に整理担当者が各現場事務所・魚住分館で実施した。

2. 調査の組織

発掘・整理調査とともに、日本道路公団の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり調査を実施した。

昭和57年度発掘調査の体制

調査事務	社会教育・文化財課
課長	藤本 繁
文化財担当参事	吉村 芳郎
副課長	道畑 實
課長補佐	池田 義雄
〃	堀 洋
埋蔵文化財係長	大村 敬通
主任	西口 和彦
〃	小川 良太
技術職員	水口 富夫
事務職員	杉木 恵子
調査担当	社会教育・文化財課

技術職員	渡 辺 昇
"	村 上 賢 治
調査補助員	小 林 正 人 (鳥根大学法文学部)

調 査 参 加 者

吉田一夫、吉田 勝、西田数美、吉本三四二、吉田政信、前田眞吾、小林静雄、西田あやの、吉田可づ子、横田美勇子、丸山みつぎ、出羽 操、欠野文朗、畠山卓久、長谷川 寛、大角直也、井上和代、利根由扶子、赤松千恵子、出田敬子、西上知予子

調 査 協 力 者 ・ 機 関

龍野市教育委員会、揖保川町教育委員会、揖保川町文化センター
 松本正信、加藤史郎、長石正道、志水豊章、市村高規、深井明比古、市橋重喜、堀本依子、前田英作、山本 哲

昭和58年度整理調査の体制

調査事務 社会教育・文化財課

課 長	西 沢 良 之
文化財担当参事	大 西 章 夫
副 課 長	森 崎 理 一
課長補佐	池 田 義 雄
埋蔵文化財調査係長	榎 本 誠 一
埋蔵文化財指導係長	大 村 敬 通
主 査	松 下 勝 均
主 任	八 家 均
技術職員	大 平 茂
事務職員	杉 本 恵 子

調査担当 社会教育・文化財課

調 査 員	技術職員	渡 辺 昇
	"	村 上 賢 治
調査補助員		小 林 正 人
整理参加者		市 橋 重 喜
"		赤 松 千 恵 子
"		出 田 敬 子
"		横 田 久 美

整理協力者

〃

志 水 豊 章

市 村 高 規

3. 調 査 日 誌

昭和57年8月23日(月)～8月30日(月)
伐採および伐採木のかたづけ

8月31日(火) 晴れ

調査前の全景写真撮影、尾根西斜面トレンチ設定。掘り始めるが、浅く15～20cmで地山となる。遺構・遺物認められず、調査の必要ないものと思われる。

9月1日(水) 曇りのち晴れ

公園杭(ST 278+00)を基準とし、尾根筋を主軸として、トラバースを組む。尾根西斜面、主軸を使って設定し、調査開始。

9月6日(月) 雨降ったりやんだり

地形測量

9月7日(火) 晴れ時々曇り

地形測量継続。東斜面・尾根上トレンチ全て遺構・遺物なく、調査対象は古墳1基となる。

9月10日(金) 曇り

1号墳調査前の写真撮影

9月28日(火) 晴れ

表土除去開始。石材数石認め始める。石屑多く散乱。

9月29日(水) 晴れ時々曇り

表土除去継続。一部2層目も下げる。除去された石材多い。

10月4日(月) 晴れ

落石や石を割った際の砕片石室内に見られる。約50cm下げると黒色土あり。土師器碗出土。側壁・奥壁の残り悪い。2石しか残存せず。石室内畦畔設定。

10月5日(火) 晴れのち曇り

墳裾部分調査。堆積土除去。須恵器大甍片数点出土。

10月6日(水) 曇り

石室内掘り下げ。平行して石材間の土砂清掃。墓底の確認行方が判然としなない。

10月7日(木) 晴れ

石室内畦畔写真撮影・実測後除去。古墳全体現時点で清掃し、写真撮影。

10月8日(金) 晴れ

石室内出土遺物撮影後実測。土器取り上げ後さらに掘り下げる。1号墳の堆積状況も含めて観察するため、墳裾から尾根頂上へ向けてトレンチ設定。

10月12日(火) 晴れ

石室内調査。黒色土上面(焼土含む)から



第1図 古墳から見た西方向



第2図 伐採風景



第3図 石室 堆積状況

後世の遺物出土。袖部付近にかたまって須恵器腕・土師器皿など出土。

10月18日(月) 晴れ

石室内再び畦畔設定し掘り下げる。玄室から始める。須恵器・土師器出土。

10月20日(水) 晴れ一時雨

一昨日に引き続き遺物出土。南側壁の一個体を除いて、全て後世の遺物。黒色土は奥壁に向かってやや落ちている。

10月21日(木) 晴れ

遺物出土状態撮影。畦畔実測後除去。玄室畦畔下から緑軸をはじめ須恵器・土師器出土。石室全体写真後、部分詳細写真、実測開始。

10月22日(金) 晴れ

緑軸周辺清掃して撮影。実測後取り上げ。羨道部掘り下げ。側壁沿いに古墳時代遺物出土。羨門付近から高台付杯身出土。

10月25日(月) 晴れ時々曇り

航空写真の準備。

10月27日(水) 晴れ

航空写真撮影。

10月28日(木) 晴れ時々曇り

同じ個所に再び畦畔設定し、掘り下げる。古墳の副葬品出土し始める。

10月29日(金) 晴れ

石室床面検出作業。鉄刀・鉄鏃・耳環と須恵器・土師器出土。土器出土状態を含めて石

室全景写真撮影。土層図付け加える。

11月1日(月) 曇りのち晴れ

玄室のみ清掃して部分写真撮影。奥壁も正面写真撮影。石室割り付け後、出土状態実測開始。

11月2日(火) 晴れ

古墳全体清掃し、岡田克巳氏にラジコンヘリを使って上空写真撮影して戴く。真上からと斜め方向の両方撮影。撮影後、遺物取り上げ。敷石と思われる石群清掃。

11月3日(水) 晴れ

敷石実測。

11月4日(木) 曇り時々晴れ

敷石の間隙から耳環・須恵器出土。上部の一部は浮いたものだった。敷石は玄室だけ。玄門に仕切り石と思われる人頭大の石2ヶあり。羨道も下げ始める。須恵器・土師器出土。

11月8日(月) 曇り時々晴れ

石室全景。四方向から撮影。遺物出土状態も個々に撮影。

11月9日(火) 晴れのち曇り

出土状態の実測。敷石もエレベーションを入れ断面図を作成してから除去。玄室はすぐ地山となるが、羨道は黒色土・黄色土が存在する。墓塚の確認作業。墳丘からは切り込んでいない。

11月11日(木) 晴れ時々曇り

墳丘面の地形測量。墳丘除去。石室内も畦



第4図 調査風景



第5図 調査に参加した人達

畔を残して下げる。袖石を最も深く墓域を掘っている。

11月12日(金) 曇り

墓域検出作業。地山から掘り込んでいる。石材の大半は石室内面を地山に着けており、墓域との間に人頭大〜こぶし大の礫を詰めている。

11月15日(月) 曇りのち雨

墓域内埋土除去。墳丘除去継続。

11月16日(火) 曇り

墓域掘り下げ継続。墓域は狭道途中でなくなる。袖石に対応する石は一段深く穿っている。写真撮影。龍子長山2号墳写真撮影。

11月17日(水) 曇りのち晴れ

石室の割り付け

11月27日(土) 晴れ

割り付けののち、実測開始。

11月29日(月) 晴れ

実測継続。



第6図 ラジコンヘリによる写真撮影



第7図 調査風景

12月1日(水) 晴れ

文化協会ふるさと資料室へ龍子長山1号墳の遺物展示するため搬出。

12月7日(火)・8日(水) 晴れ

実測継続。

12月24日(金) 晴れ

一部実測図補足。古墳全体清掃、現地説明会準備。

12月25日(土) 晴れたり曇ったり

午後2時から龍子向イ山1号墳と合わせて現地説明会実施。約250名の方が参加。

昭和58年1月5日(水) 雨

龍子長山2号墳石室割り付け後、実測開始

1月6日(木)〜7日(金) 晴れ時々曇り

2号墳石室実測。地形測量。1号墳断ち割り

1月10日(月) 曇り

2号墳地形測量。器材を龍子向イ山古墳群のテントへ運ぶ。龍子長山1号墳の調査全て終わる。



第8図 石室全景

II 位置と環境

富士野峠は、数多くあるうちの一つの分水嶺である。南に流れ込んだ水は大身谷を形成し、搦保川の源流となっている。大身谷を流れた水は三方川となり、途中公文川・福知川を集め、御方郷の平野を潤し、戸倉峠に源を発する引原川と穴栗郡一宮町安積で合流し河川の体をなしてくる。関賀里や播磨国一之宮である伊和神社の鎮座する伊和里の小盆地を南流し、中小河川を集めながら、山崎町・新宮町・龍野市・搦保川町と流れ徐々に大河川の趣きを増しつつ、龍野市搦保町真砂で、搦保川の最大の支流である林田川と合流し、姫路市網干区興浜で播磨灘に注ぐ全長69.73kmの一級河川である。



第9図 搦保川の源、大身谷

林田川との合流点は、播磨国風土記に

「所以称宇頭川者、宇須岐津西方、有教水之淵、故号宇頭川……」

と記され、風土記で有教之淵と呼ばれていたことがわかる。搦保川も宇頭川と呼ばれていたようであるが、下流域に限られた名称と思われる。このように搦保川流域は、播磨国風土記からの遺称地が多く、また数多くの著名な遺跡が存在する。吉島古墳・新宮宮内遺跡・小神廃寺・養久山古墳群など列举出来る。龍子長山1号墳の所在する搦西平野の環境を考える場合地理的にも歴史的にも搦保川を抜きに語ることは出来ない。

龍子長山1号墳は、龍野市搦西町龍子字長山および龍野市搦西町南山字向イ山の丘陵上に立地する古墳である。当丘陵は、搦保川中流域に形成された搦西平野の南縁にあたる。搦西平野は、北を戒場山などの山塊、東を搦保川、南を養久山に限られた東西約4.5km、南北約2.2kmの西が南に下がった平行四辺形をしており、それに小犬丸・中垣内川に形成された谷平野が続いている。搦西平野自身、上記三河川によって運ばれた土砂によって成立した平野である。龍野上郡断層が平野北縁を東西に走っており、その上を律令時代の山陽道が通っていたと考えられる。搦西平野は、第三紀における侵食作用で生じた谷に土砂が堆積した谷平野のため、生産性の高い土地であると言えよう。この平野に最初に足



第10図 搦保川・林田川合流点(有教之淵)



- | | | | | |
|-------------|------------|-------------|--------------|------------|
| 1. 龍子向イ山遺跡 | 6. 美久乙城山遺跡 | 11. 神戸北山墳墓群 | 16. 片島遺跡・古墳群 | 21. 半田山古墳群 |
| 2. 龍子向イ山古墳群 | 7. 美久山古墳群 | 12. 神戸北山東遺跡 | 17. 尾崎遺跡 | 22. 野田宮跡 |
| 3. 龍子長山古墳群 | 8. 乙城跡 | 13. 神戸北山遺跡 | 18. 池の谷墳墓群 | |
| 4. 龍子三ツ塚 | 9. 美久谷遺跡 | 14. 二塚古墳群 | 19. 佐江遺跡 | |
| 5. 鳥坂古墳群 | 10. 赤山墳墓群 | 15. 笹田古墳 | 20. 清水遺跡 | |

第11図 龍子長山1号墳の位置と周辺の遺跡

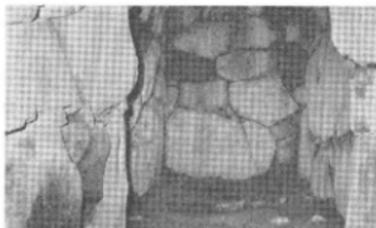
跡を残したのは、小犬丸と清水で共に圍場整備に伴って縄文後期の土器が採集されている。小犬丸では、広範囲の地域から数点の後期の土器片が採集されている。広範囲で少量の採集ではあるが、土器には大きな磨滅は認められない。清水も小犬丸と同時期の土器がやはり少量採集されている。2遺跡とも小犬丸は小犬丸川、清水は中垣内川の微高地上に生活址が営まれたものと思われる。



第12図 美奈志川(中垣内川)

揖西平野での最古の遺物は、縄文後期であるが龍野市内でも神岡町では旧石器時代まで遡る遺物が見られる。大住寺の皿池遺跡などで翼状刮片やナイフ形石器が採集されている。龍野市の南東部の境界にあたる揖保郡太子町松尾の坊主山遺跡でもナイフ形石器や有舌尖頭器が出土している。

龍野近辺で生活址として明らかな遺跡として譽田町片吹の片吹遺跡が挙げられる。縄文中期～後期の住居址5棟が確認されており、兵庫県下でも有数の縄文時代の遺跡としてとらえられる。晩期になると、片吹も継続して遺跡は存続しているが、西方の揖保町門前遺跡でも突帯文の土器が見られる。門前遺跡は弥生前期へと引きつがれて発展する。現時点で知られている限りでは、弥生時代中期までの遺跡の立地は門前・片吹や揖西の清水・尾崎のように平地に存在するが、中期後半になって変化が生じるようになる。丘陵上に遺跡が営まれるようになることである。龍野市周辺でも、中期から遺跡の数は多くなるので、揖西平野だけで見てみるなら、西から片島・龍子向い山・養久乙城山の3遺跡が南縁に、北縁には小犬丸速渡脇・長尾タイ山が立地している。同時期に平野には、尾崎・佐江に遺跡が営まれており、丘陵部と平地の両方に遺跡が存在するという事実がある。また、現時点では、丘陵上に立地する全ての遺跡は中期末で終息し、後期へと引きつがれる遺跡はない。それに対して、平野部では尾崎だけは、丘陵部の遺跡と消長を軌を一にするが、佐江遺跡は調査が行われていないため不明瞭だが、遺跡は継続しており、製塩土器も出土している。後期になると、堂の下・清水新・竹竹の諸遺跡が現われ始める。同様に後期の揖西平野の母集落と思われる清水遺跡も生活を再び始める地点となる。時期の不明な小犬丸のように平野内の各地で小集落が現出するようである。



第13図 中垣内1号墳

弥生時代末期になると揖西平野の周縁部の山塊に数多くの墳丘墓が構築され始める。著名な養久山や白鷺山を代表し新宮東山、池の谷などに揖保川下流の地域とともに墳丘墓が見られる。

龍子長山古墳群は、その代表例である養久山の延長上の山塊の北に派生する尾根上に存在し、その尾根を追っていくと頂上に揖西で

最初の前期古墳であろう龍子三ツ塚が位置している。龍子三ツ塚と養久山は、小さな峠である鳥坂峠によって分断されている。峠を見下ろす尾根上には、前期後半～後期にかけての5基から成る鳥坂古墳群があり、三ツ塚からの丘陵には龍子向イ山・二塚の古墳群が位置している。龍子三ツ塚の2基と鳥坂の3基を除くと、龍子長山古墳群同様、後期の古墳である。後期でも丘陵上に位置する古墳と尾根上に存在する古墳の対比は興味深いものがある。揖西



第14図 佐江照円寺石棺

平野南縁では、片島・宿禰塚・笹田・鶴塚のように単独で立地するものが多い。しかし、北縁では小神・景雲寺・中垣内・長尾タイ山のように規模は小さいながらも群集する傾向にある。鳥坂3号墳や片島1号墳など間隙を埋める古墳も僅かに認められるが、前期・後期の墓、とりわけ前期に相当する墓の割合に中期の古墳は少数である。墓以外では、龍子向イ山の祭祀遺構が同時期の遺構である。やや遅れて長尾タイ山4・10号墳が築造される、小規模ながら墳丘は方形をしており、特異なあり方を示す。引き続き長尾タイ山2・3・5・6号墳、笹田古墳・片島2号墳が造営されている。長尾タイ山の特徴的な群集墳の存在を除いて、揖西の南縁地域に集中している。

しかし、6世紀中葉の横穴式石室が採用され始めると状況は変化する。著名な西宮山古墳が初期横穴式石室を主体部として全長34.8mの前方後円墳の姿を揖保川を望む揖西の北縁東端に現わす。また、長尾タイ山では1号墳が同種の初期横穴式石室を埋葬主体とする古墳が築かれる。径15mの円墳であり、馬蹄をはじめ豊富な副葬品を有していた。平野北縁の両端に初期横穴式石室が採用されていたことになる。この力が継続したのか、北縁では24基以上が群集する中垣内古墳群をはじめ、場山山麓に景雲寺、小神の群集墳が見られる。石室の規模が大きいのも中垣内1号墳・狐塚と北に偏在している。南縁では龍子向イ山の5基を最高に単独や2～3基で構成される小規模なものばかりである。石室規模も龍子向イ山1号墳が、全長6.8mと中垣内1号墳の全長10mをはるかに下回る。

律令期に入ってもこの傾向は存続する。龍野上郡断層を利用したこともあろうが、平野北端を山陽道が東西に走っていたのも無関係とは言えないだろう。山陽道沿いに東から小神・中垣内・小犬丸に寺院もしくはそれに類する官衙的遺跡が存在しており、他の古代瓦の出土地も風雅園、伝大造寺と北に限られている。

しかし、古墳時代の終末近くから古代にかけて北縁地域だけが勢力を誇っていたのではない。龍子向イ山1・2号墳の横穴式石室内における火葬という特異な葬法を採用しており、龍子周辺が特徴的な文化（葬法における）を持っていたことが窺われる。それに続くように本報告にかかる龍子長山1号墳では石室の再利用を12世紀に至るまで9世紀から連続と行っているようである。進取的であるとは断定出来ないが、文化的に新しい風を感じさせる地域である。

参考文献 「龍野市史第1巻」「昭和55年度兵庫県歴史文化財調査年報」「長尾・タイ山古墳群」

Ⅲ 調査結果

1. 古墳の位置

龍子長山1号墳は、兵庫県龍野市揖西町龍子字長山、同揖西町南山字向イ山に位置する古墳である。南から北に長く延びる通称長山の尾根上に立地している。現在の行政区分でいうなら西播地区の龍野市であるが、旧国名で呼ぶなら播磨国に位置する。「播磨国風土記」の記載では揖保郡桑原里に相当し、「和名抄」の郡・郷名では同じく揖保郡桑原郷に比定される地域に立地する古墳である。

龍子長山1号墳は、龍子三ツ塚古墳の存在する通称三ツ塚山塊から北へ東に向かって支尾根が幾筋か分かれる1支尾根上に立地している。三ツ塚山塊には、前期に遡る三ツ塚1・2号墳や鳥板1～3号墳が立地しているが、他は全て後期の横穴式石室を主体部とする古墳である。龍子長山古墳群は、尾根上に占地する点で、北東側に築造された龍子向イ山1～4号墳とは異なっている。長山丘陵の尾根上南側に約200m離れて2号墳が存在する。今のところ2基から成る尾根上に築造された古墳群である。

古墳の築造された長山は、大字の龍子と南山を囲する南から北へ延びる尾根で、山塊はもちろんのこと尾根端およびその延長線が2つの大字を画している。古墳からは南方は山で遮られるが、他方向は眺望可能である。が、南山の奥谷は西方に見れるものの南山の集落は見ることとは出来ない。北東方向の眺望は良く、奥から小池上池・新池・小池中池・小池下池の溜池が營造された谷を隔てて龍子向イ山古墳群の所在する向イ山を右(東)方向の限りとし、龍子集落を通して揖西平野・白鷺山・的場山を可視範囲とする。眺望関係だけを重視すると間違いなく龍子方向を意識していたことになる。

眺望関係にある古墳は、南西方向に片島古墳群が、北東方向に龍子向イ山3号墳、景雲寺古墳群、白鷺山墳墓群がある。

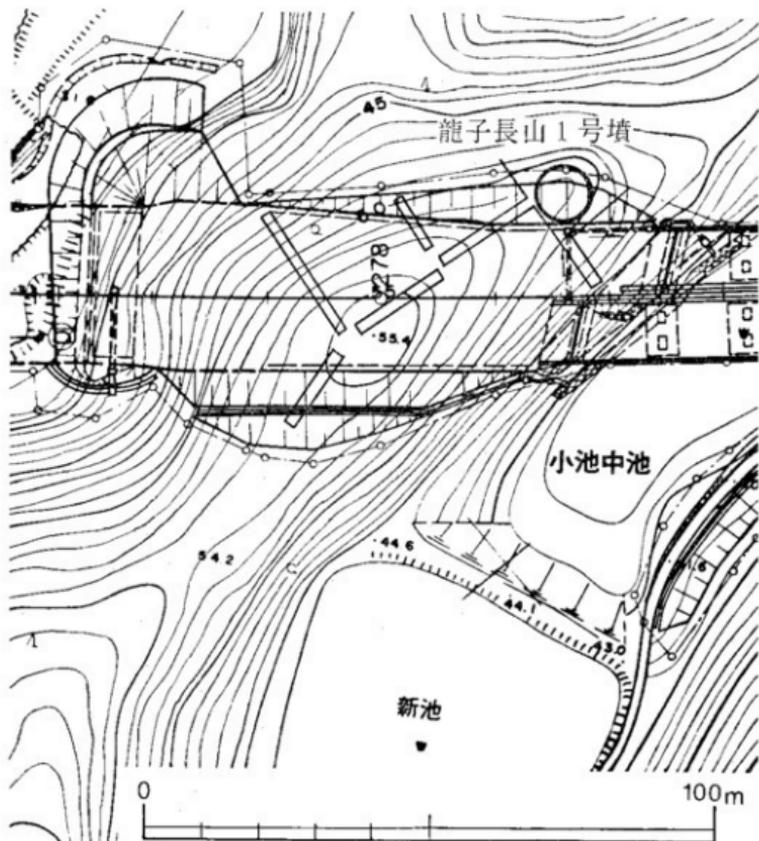
古墳は、三ツ塚山塊から北へ派生した支尾根丘陵上に立地する。長山は、北へ向かって徐々に低くなり、2号墳の位置する付近から平坦化し、54.2mから逆に高まり、確認調査を実施した55.4mを頂上として再び緩やかな下り斜面となる。下り斜面が、やや平坦化する個所に古墳は占地している。その後、全体的には北へ向かっての緩斜面ながら、部分的に高まりを呈しながらやせ尾根が長く続いている。

2. 外形(墳形)

古墳の立地する尾根上は、雑小林に覆われてはいたもののマウンドが分布調査で看取され古墳の存在は比較的容易に確認出来た。ただ、天井石をはじめ石材は早い時期に採取されていたので、地元では古墳(ツカ)の認識は薄いものであった。北側に位置する1号墳とは、性格を



第15図 龍子長山1号墳の位置

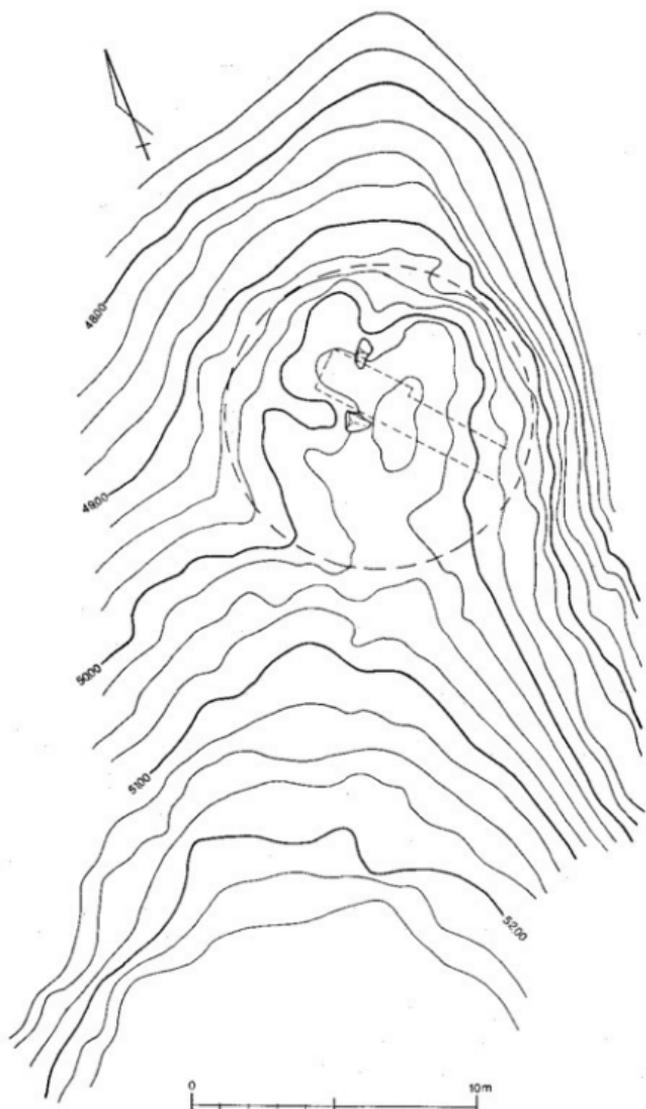


第16図 試掘溝配置図

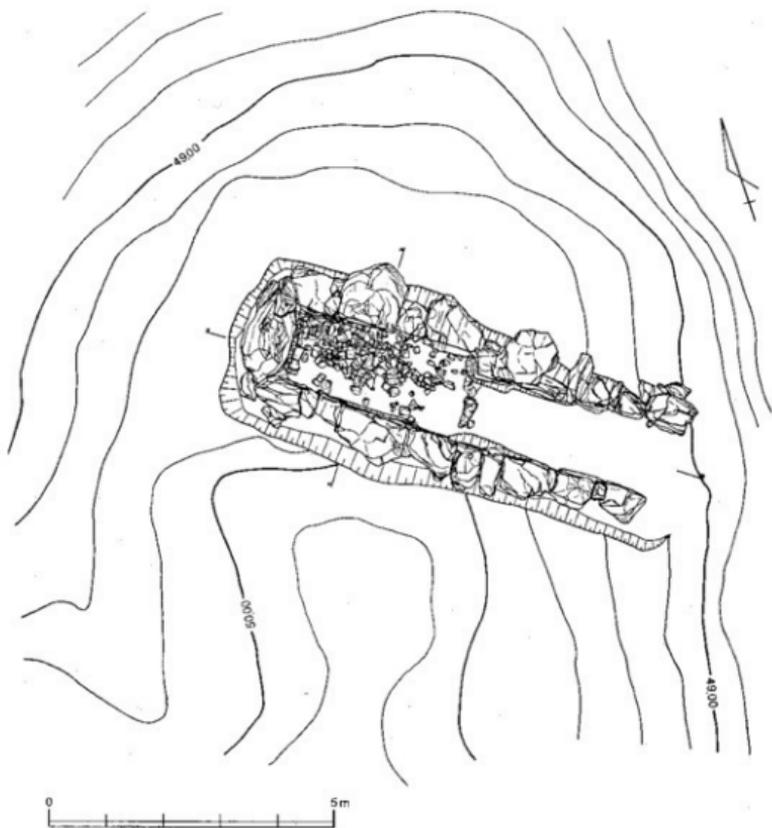
異なる2号墳は、古くから開口していたようで、地元の人は籠子向イ山1・5号墳と共に以前に入ったことがあるなどと、ツカとしての記憶が残されている。

古墳は、緩斜面上に立地しているものの平坦に近い斜度の尾根線上に位置する。稜線上に立地しているため墳丘の流失も相当考えられる。また、上方からの流土の堆積も見られる上に天井石をはじめとする石材の採取によって墳丘も大きく改変されている。

発掘調査前の状況は、自然作用と人為的な力によって、本来の姿は失っていたものの墳丘は十分看取出来た。墳丘南側の標高上方のコンタラインは、尾根上に設定した墳塚(土層)確認トレンチによる浅い掘り割りを十分に予想させた。特に西方は、コンタラインの入り込みが顕



第17圖 地形測量圖



第18図 墳丘測量図

著で、49.75～50.25mの屈曲したラインは墳裾を示しているものであろう。

調査の結果、東西は明言出来ないが、南北では墳裾を決め得た。南側は、浅い溝状の掘り割りが弧状に巡っており、墳丘を画すものと思われる。北側でも盛土の在り方から土層が平坦化する点を墳裾と指摘出来そうである。この数点から復原して、径10m前後の円墳と考えられる。現実には、南北の尾根筋がやや長くなっていたかもしれない。

墳丘の高さは、現状では最高値は1.4mを測り、南側では0.4mを測るにすぎない。ただ、石室の欠壊を考慮するならば、奥壁・側壁とも現高より1石は積まれていたと思われるので、数10cm石室高が上まわることは明らかで、これに盛土を加えると墳丘高は標高の低い墳裾からの計測値は2.5m以上と考えるのが妥当であろう。

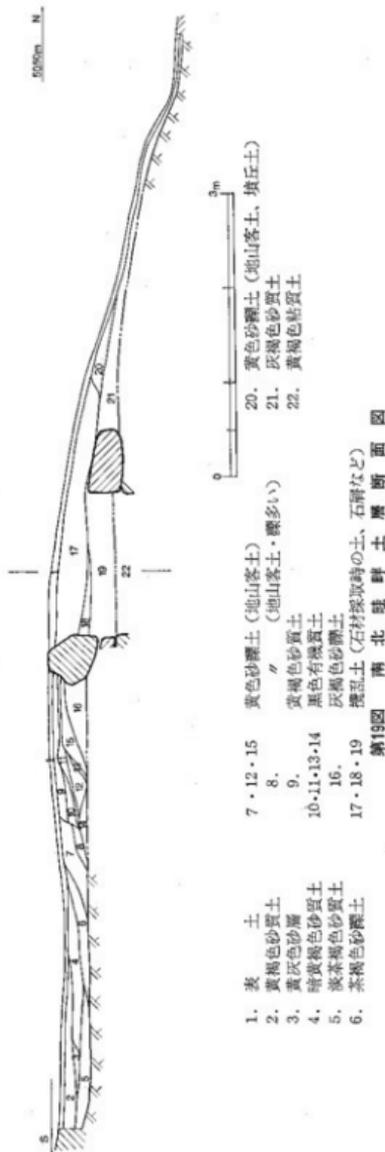
3. 墳丘築成

当墳の主体部は、横穴式石室である。古墳築成に際して、標高の高い方（南側）の尾根筋を削削している以外は、全て盛土によって墳丘を築いている。南側以外は、削り出した痕跡は見られず、他の三方は墳裾を画するための手は加えていない。南側の浅い掘り割りだけが削り出された部分である。

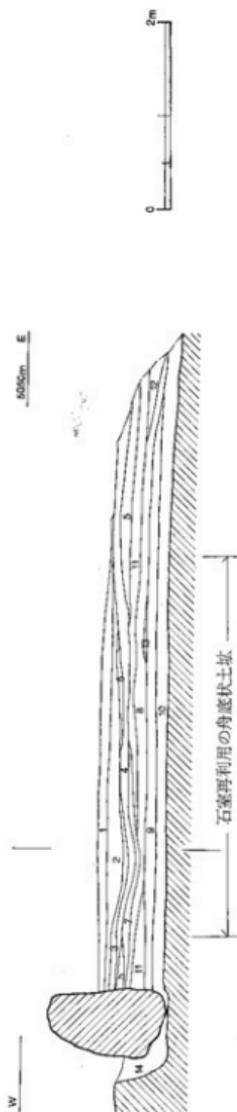
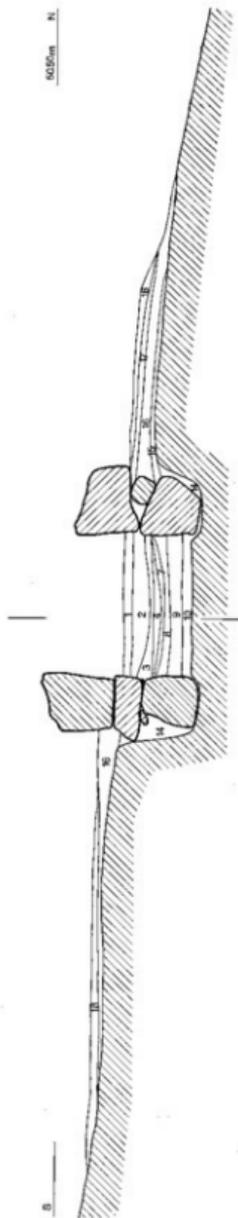
まず、地山から墓塚掘り方を穿っている。墓塚を穿ち、基底石を構築してから地山土を削り出した土を中心とする黄褐色砂礫土で墓塚を埋め戻す。石室2石目以上を構築しつつ、墳丘を築き始めている。下部墳丘築成土と思われる灰褐色砂礫土を盛っている。墳塚まで端は及ばず、墳頂から墳裾までの約3分の2の箇所まで灰褐色砂礫土を盛っている。北半だけは、この下に有機質を多く含む黒褐色土が1層存在する。この時点で石室の構築を終了し、上部封土に作業が移るものと思われる。原則的には、有機質を含む黒褐色土と地山客土を主とする山土である褐色系の砂礫土との互層によって墳丘を築いていたようである。

墳丘北側は、丘陵斜面のため盛土の自然流失が著しいが、現状で観察する限りでは、墳丘の形状に則して上から下まで同一層が互層になって盛っているようである。

しかし、尾根筋にあたる南側では複雑な様相を呈している。尾根上で盛土が流れるためか、墳丘の高さを増すためであろうか、平面的な広がり割に高く盛っている。そのため土層図で見ると、幅の狭い短い盛土が多く見られる。層の数は、北側の数倍あることになる。墳丘上部が残存していないが、南半は多



第19図 南北 畦畔土層断面図



- | | | |
|-----------------|------------|------------|
| 1. 黄褐色粘質土 | 7. 砂 | 13. 灰 |
| 2. 灰褐色砂礫土 | 8. 灰色有機質土 | 14. 赤褐色砂礫土 |
| 3. 暗黄灰色粘質土 | 9. 黄褐色砂質土 | 15. 黒褐色土 |
| 4. 黒色有機質土 (炭含む) | 10. 黄灰色砂礫土 | 16. 灰褐色砂礫土 |
| 5. 黄灰色砂質土 | 11. 赤褐色土 | 17. 黒褐色土 |
| 6. 黄灰色砂 | 12. 黄灰色砂質土 | 18. 暗褐色砂質土 |

第20圖 墳丘および石室内土層断面図

重の層で構成された墳丘となっていたであろう。原則的に山土と有機質土を含む土を交互に盛っていることに変わりはない。

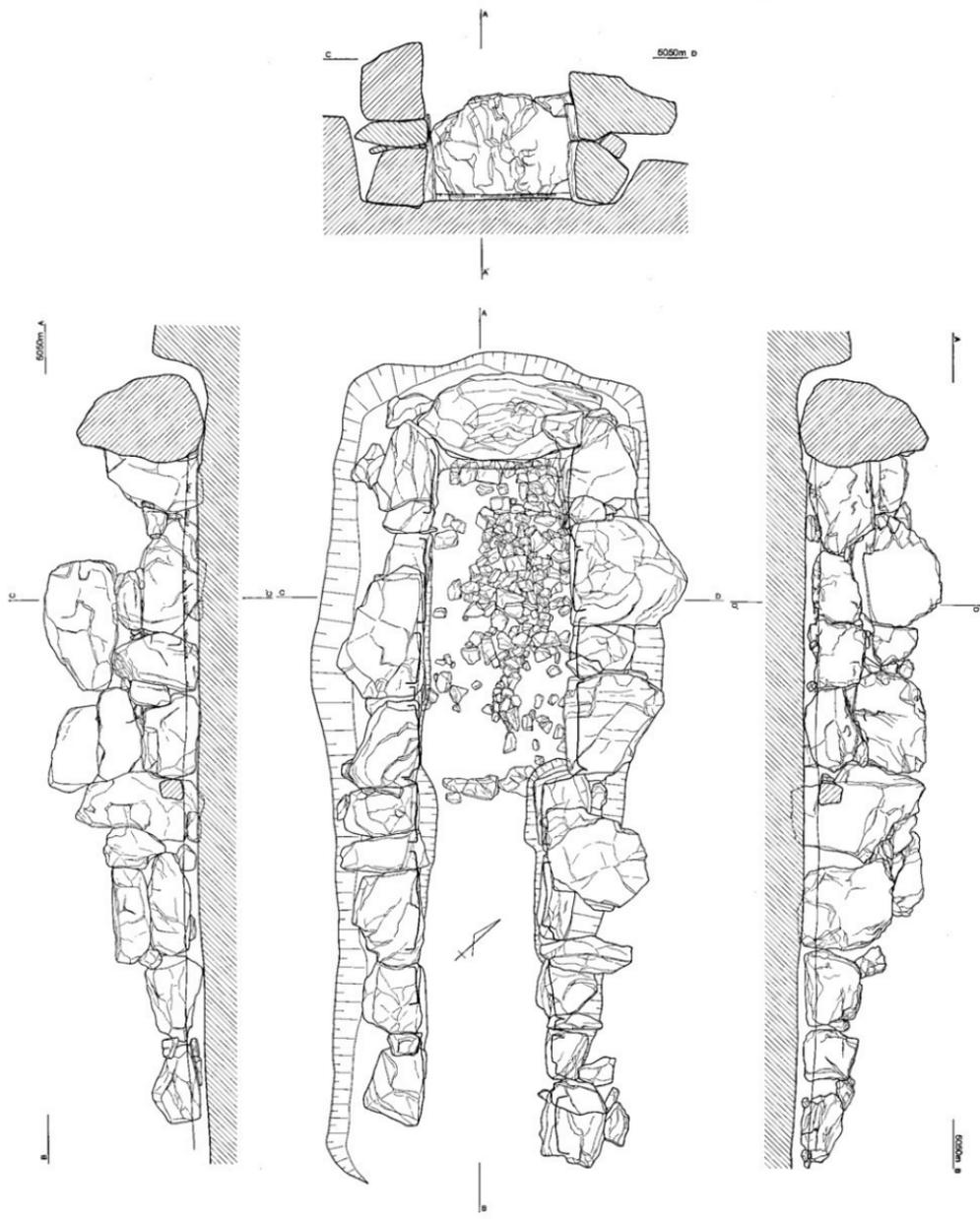
4. 横穴式石室

調査に入る段階で、石室は手を加えられ天井石はもちろんのこと側壁の多くも失っていた。石材採取のため、石室は損壊を受けたもので、石室内をはじめ周辺に石屑となったチャート片が散乱していた。石屑を含む堆積土中から土師質小皿が出土しており、石室崩壊の時期を示唆する遺物と思われる。灯芯炭や煤は看取出来ない。近世の所産の破片である。天井石の全てと側壁の一部は欠失していたものの、かろうじて1石目だけは全て残っていたので、平面プランは把握できた。

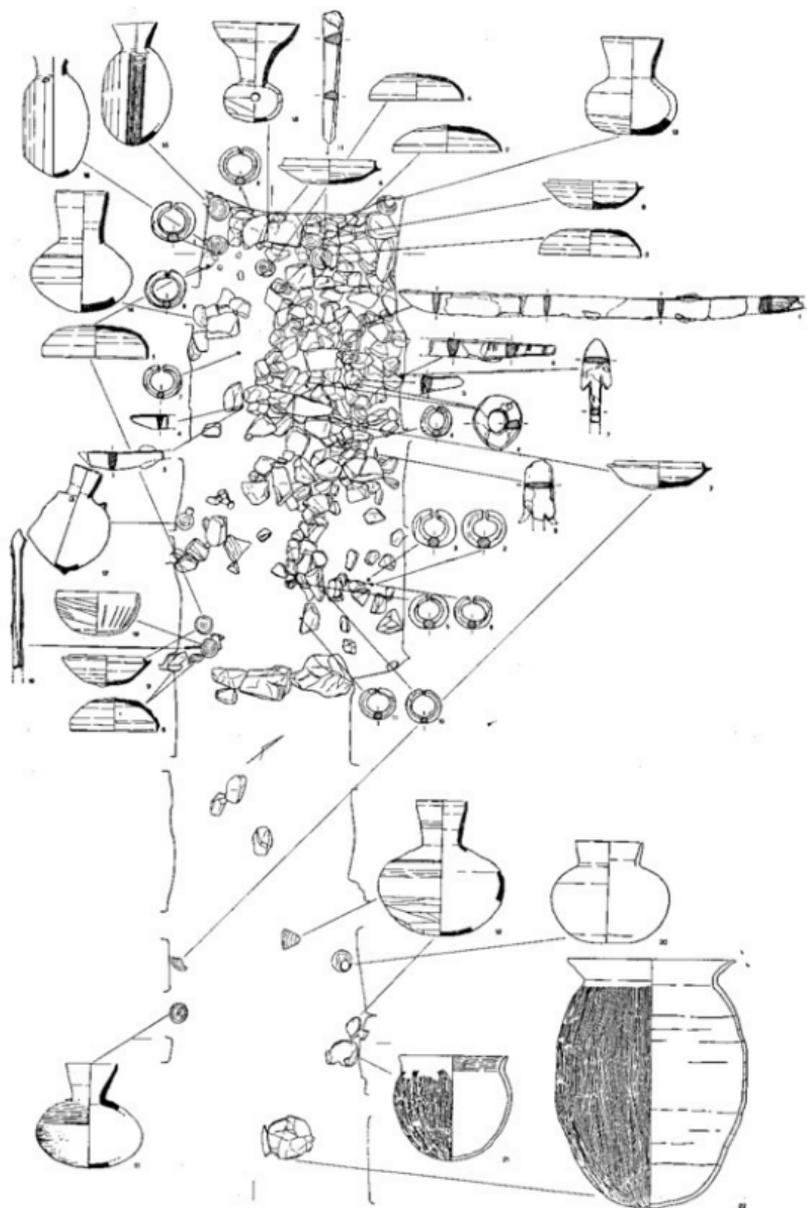
石室の規模は、全長6.5mで奥壁での幅は1.4mを最大幅は1.6mを測る。玄室は3.3mで羨道は3.2mの長さである。玄門幅は1.25m、羨門幅は1.3mである。石室は左片袖で、袖は0.35m、最大残存高は1.4mを測る。玄室は、奥壁を最小とし、玄門側に最大値を取る台形のプランを呈する。袖を設けるために行ったのであろうか。その場合、石室構築に際して平面プランを決めてから築造したことになる。当然奥壁を考慮しつつ石室を築いてはいるが、袖石の安定を図るような構築方法を基本としているようである。それは、袖石と袖石に対応する向かい合わせの石との2石の位置を決めて据えているからである。他の石材に比べて1段深い掘り方を2石だけ有している。墓埴掘り方をさらに2石の部分だけ深掘した形状である。奥壁の1面と石室長の中心に相当する2石の3点で安定を図り、石室の基礎とする意図が看取される。奥壁と袖石の先後関係は詳らかではないが、基本プランの上で考慮に入れられていたであろう。

構築の順を調査結果から考えてみると、まず最大長7.5mの墓埴を掘る。さらに石材を掘え置くために平面プランに即してコの字形に溝状に掘り下げる。この段階で、平面プランを決定しており、袖石部分をより下げて安定を図り、基底石を並べたと思われる。以後、墳丘築成の項に記したとおり、墓埴を裏込めの石を入れつつ埋め、2石目以上を構築する。この際の用石法は、原則的には横積みを採用している。ただ、袖石と袖石に対応する右の2石は縦積みにしており、側壁の2石目と同じ高さまで及んでいる。奥壁は、立面観はどっしりとした印象を与える左右と上下の数値の近い本古墳中最大の石材を使用している。幅1.5m、高さ1.1mの上部の両角を欠いた隅円の方形を呈する石材で、底近くに最大厚である0.9mの厚さを有する奥壁である。1石目～3石目と残存する石は基本的に横積みであるが、部分的に小口積みを採用している。小口積みの箇所は、石材と石材の間の狭い部分や石材同士の上と下の両石に共に重心がかかる箇所に限られている。それゆえに横積みを原則に採用していると考えて良いものと思われる。石積みに関しては、裏込めを多量には使っていないが、1石の人頭大～こぶし大の石が有効に力を受け、石室を構築している。石材が最大限大きく見えるように最も広い面を石室内に向けている。石材の断面は方形よりも台形や三角形に近いものが多数を占める。

現状での観察では、例えば左(北)側壁の奥から2石目のやや小さめの石は、両側からの力



第21圖 石室実測圖



第22圖 古墳時代遺物出土狀態

が加わっており、一見最初に据え置いたように見える。しかし、両方の石の位置を決めて間に適合する石を求めた結果、決定した石材と思われる。石の置いた順序は、袖石から奥へ、同様に羨門方向へと築造したと思われる。

5. 遺物出土状態

遺物は、石室が再利用されていたためか、耳環や土器片などの小さな遺物を除いて、石室の中心部では検出されなかった。土器に限っていうならば、小片を除いて石室の奥壁・側壁沿いから出土している。石室再利用の遺物とは、全くオーバーラップしない。軸を同じくして石室中央部に浅い舟底状の土版が存在したためと思われる。再利用に使用した部分からは耳環・刀子片・土器片しか出土しておらず、古墳時代の埋葬面を荒らしているように見えるにもかかわらず、周辺の遺物が原位置を保っている。これは、後述するように古墳を意識して再利用した傍証にもなる。

遺物は石室周辺から出土しているが、大きなまとまりや出土状況の特徴は看取出来る。まず土器は、奥壁と玄門周辺をそして羨道部の3群に分けられる。奥壁のグループは、最も出土量が多く耳環・不明鉄器とともに側壁の奥から1石目の奥壁前面の地域である(第I群)。奥壁と右(南)側壁のコーナーから提瓶(16)が口縁を石材の隙間に差し込むように据え置かれ、右側壁沿いに提瓶(15)、杯蓋(1)そして2石目との間に長頸壺(14)が出土している。提瓶(15)は口を側壁に向け、杯蓋は上向きに、長頸壺は口を内側にに向けて出土した。提瓶・杯蓋の上からは共に耳環が検出された。奥壁と左(北)側壁のコーナーからは、他遺物と比べてレベルの高い位置に長頸壺(13)が出土している。奥壁前面では、杯身(6・8)、杯蓋(2・3・4)・矚(18)が出土し、杯蓋(3)の中からは不明鉄器が確認された。杯蓋は、3点とも天井部を下に口縁部を上にしていた。奥壁に接して横向きに出土した杯身(8)や矚は敷石間に挟まっており、容易に動かない状況であった。

次に土器が出土しているのは、第III群で玄門周辺の地域である。出土個所は、袖を設けない右側壁前に限定されている。玄門石(関石)内側の玄室内にも限られている。第II群が須恵器だけの出土に対して、第III群は土師器杯(19)を含んでいる。他に、鐘とともに杯身(9)、杯蓋(1・5)がある。杯蓋(5)は、第I群の提瓶(16)と同じように側壁石材の隙間に入り込んでおり、平面プランを直線にすれば、プラン外に出てしまう出土位置である。

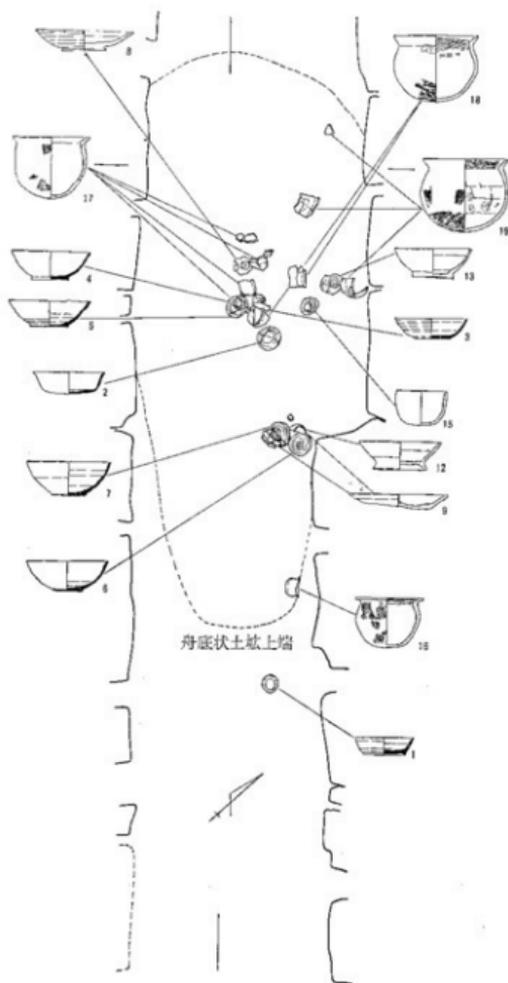
最後に羨道部(第IV群)は、両側壁沿いで出土している。右側壁は、開口部側から長頸壺(11)、杯身(7)が、左側壁は同じく羨門から土師器甕(21)、長頸壺(12)、土師器直口壺(20)が出土している。また、羨門中央から土師器・甕(22)が1点だけ出土している。羨道部は、後世の手が加えられているため、壁沿いしか残存していなかったかもしれないが、本来羨道中央部は土器の副葬を行わなかった可能性もある。第IV群は、土器以外の出土はなかった。土器だけではあるが、土師器が3点出土しているのは指摘出来る特徴であろう。

右側壁沿いの玄室から、復原推定すると双口の壺になりそうな異型土器(17)が出土してい

る。第Ⅲ群とは約70cm離れているため、第Ⅲ群には入れ難い。第Ⅱ群唯一の土器になるが、周辺は埋葬時の状況を保っておらず、後世の改変を受けている。旧態を残していれば、他に土器があったかもしれない。

鉄器・耳環は、不明鉄器(11)と耳環3点(1・8・9)の4点が第Ⅰ群、鉈(10)が第Ⅲ群で出土している以外は、全て第Ⅱ群に包括される玄室部分からの出土である。第Ⅱ群の出土状況は、敷石の残存に比例しているため、右半分の資料は散逸したものであると思われる。奥壁に近い個所で、刀(1)が鋒を奥に向けて検出され、20cm離れて鉈が2つに破損して出土し、周辺から鉄鏃(7・8)が出土している。耳環は、中央部で1点出土しているが、他の6点は袖に近い個所で検出された。

鉄器・耳環の出土状態を見てみると、全てが原位置を保っているとは思えない。それは鉄鏃の破損度などからも窺われる。しかし、刀の出土位置は、本来の副葬位置と考えて大過ないと思われる。



第23図 石室再利用時遺物出土状態

6. 古墳の再利用

龍子長山1号墳は、古墳時代以外の遺物も数多く出土しており、20点余を数えることができる。ただ、出土位置は石室内に限られている。

土師質小皿2点は、石材採取時のものか、石材採取時に混入したものである。石材を削った石屑を含んだ土層中から出土している。出土土層からも最も新しい時期を示す遺物である。

石屑を含んだ隣層下には、地山土と有機質土を含んだ柔らかい堆積土が40cmあり、その下には比較的硬くしまった黄褐色粘質土・灰褐礫土を20~25cm下げたところ、黒色有機質土上面から、土師器甕が最初に出土し、遺構の存在の可能性を喚起させた。黒色土を精査すると土器群が検出され、後世における古墳の再利用例の好資料となった。

遺構は、火を用いたものであるが、長期間および高温度に上げた火を使用したものではない。奥壁から1.5mを最深とする緩やかな舟底状の土壇を使用している。土層から明確に掘削したものか、自然堆積で舟底状になったかは判断し兼ねる。ただ、羨道部に堆積している下層の黄灰色砂質土が切られ奥壁で現われ、レベルが等しいのは、浅い穴を掘ったことを肯定する資料には十分なり得る。奥壁から0.6mの地点から下がり始め、最深部から徐々に土層は上がり羨道中途で平坦になる。遺構とするならば、長さ4m、深さ0.25mの浅い土壇となる。横断を観察すると、最深部では水平で石室全体を使っているが、玄門では深さ0.14mと浅いレンズ状で石室中央だけを深く穿っている。

土壇の底には、厚さ6cmの焼土が底を中心に堆積し、その上に炭・灰を含む黒色有機質土が存在する。この黒色土層上に土器は広がっている。火を焚いた上に土器を置いたものだが、土器そのものには火を受けた形跡はない。

土器は、最深部から0.7~0.8mを中心とし、0.5~1.2mの間に集中している。土壇は石室主軸に掘られており、土器も主軸上と主軸に直交するように出土していることから、横式石室を意識して土壇ならびに土器配置を企画したものと思われる。主軸上に奥から土師器甕片(17)、緑釉(8)、土師器甕片(18)、須恵器碗(4・5)、須恵器杯(3・2)が出土し、直交する方向には主軸から土師器甕片(18)、土師器碗(13)、土師器甕(19)が出土している。破砕される散乱しているが復原すると9個体の土器となった。土師器甕3、同碗2、須恵器碗2、須恵器杯2、緑釉皿1の9個である。同じ埋土中から土師質碗(15)も出土している。

玄門部でも土器が集中して出土した。須恵器碗2個(6・7)で土壇の遺物よりも新しい時期の土器である。

羨道からも2点の土器が出土している。土師器甕(16)と須恵器杯(1)である。須恵器は、再利用の土器に比べて古い時期の所産である。再利用の初源を決める資料となろう。土層的にも下層から出土している。

IV 遺 物

1. 古墳時代の遺物

(1) 土 器

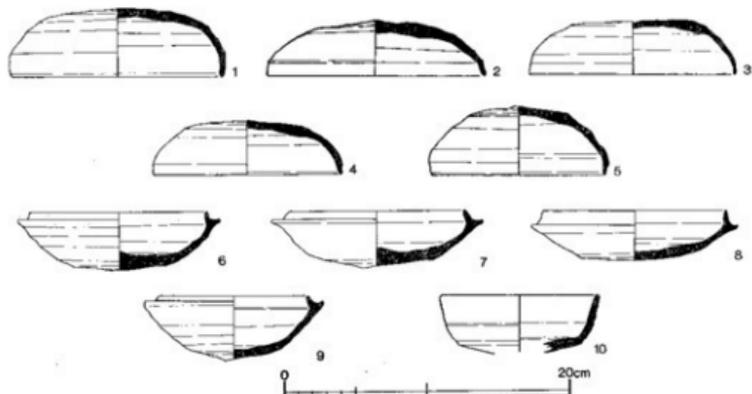
龍子長山1号墳より出土した土器のうち古墳時代に属すると思われるものには、須恵器では杯蓋(1~5)、杯身(6~9)、無蓋高杯(10)、壺(11~14)、提瓶(15・16)、双口壺(17)、瓿(18)、土師器では杯(19)、壺(20)、甕(21、22)がある。

a 須 恵 器

杯蓋 (1・2・4)は天井部外面に回転ヘラ削り調整を行っているが、その範囲は $\frac{1}{2}$ 未満にしか及んでいない。(1)は口縁端部が断面三角形をしている。大きく焼け重んでおり口径は最小14.5cm、最大15.9cmを測る。天井部外面に施された回転ヘラ削り以外は内面外面ともヨコナデが施されている。(2)は口縁部が天井部より外反して延びる。天井部の内面には、同心円の当て具の痕跡を認める。天井部外面の回転ヘラ削り以外の部分はヨコナデが施されている。(3)は天井部外面はヘラ切り痕を残しており、部分的にナデが施されている。その他の部分は内外面ともヨコナデが施されている。全体的に若干歪んでいる。(4)は口縁端部がつまみあげられたように、やや外方に広がる。天井部外面の回転ヘラ削りの部分以外は、内外面ともヨコナデが施されている。(5)は天井部外面に回転ヘラ切り痕を残している。口縁はやや内彎している。他のものに比べて口径が12cmと小さく、口径に対して器高が高い。杯蓋の中で最も新しい様相を示すものである。

杯身 (6)は口縁の立ちあがりがほぼ直立する。体部下半部分は、回転ヘラ削り調整が施されている。底部はヘラ切りがなされており、部分的にナデが施されているが、ほとんどは未調整である。その他の部分には、内面外面ともヨコナデが施されている。(7)は立ちあがりがやや内傾している。底部はヘラ切りがなされ、未調整である。その他の部分はヨコナデが施されている。また底部中央の器壁が厚くなっている。(8)も調整は(7)と同じであるが、口縁の立ちあがりの傾きが(7)よりも緩やかである。また立ちあがりの長さが1cmあり、器高に占める割合の大きい事が特徴である。また形が若干ひずんでいる。(9)は立ちあがりが内傾しており、内面には、受部と体部を接合させた際に生じたと思われる一条の沈線を持つ。底部外面は、ヘラ切りの際の粘土が付着しており、未調整である。体部外面下方では、ヘラ削りが認められる部分もあるが、ほとんどはヨコナデ調整が行われている。内面もヨコナデが施されている。体部の $\frac{1}{2}$ ほどが内側へ歪んでいる。

高杯 無蓋高杯の杯部のみが出土しており、口縁部で $\frac{1}{2}$ ほどしか遺存していない。実測図の正面図は、断面図を反転復原したものである。口縁端部は丸い。底部より口縁端に達する中程で外面に段を持つ。この部分よりやや内傾しつつ直線的に口縁端に至る。また底部と口縁の



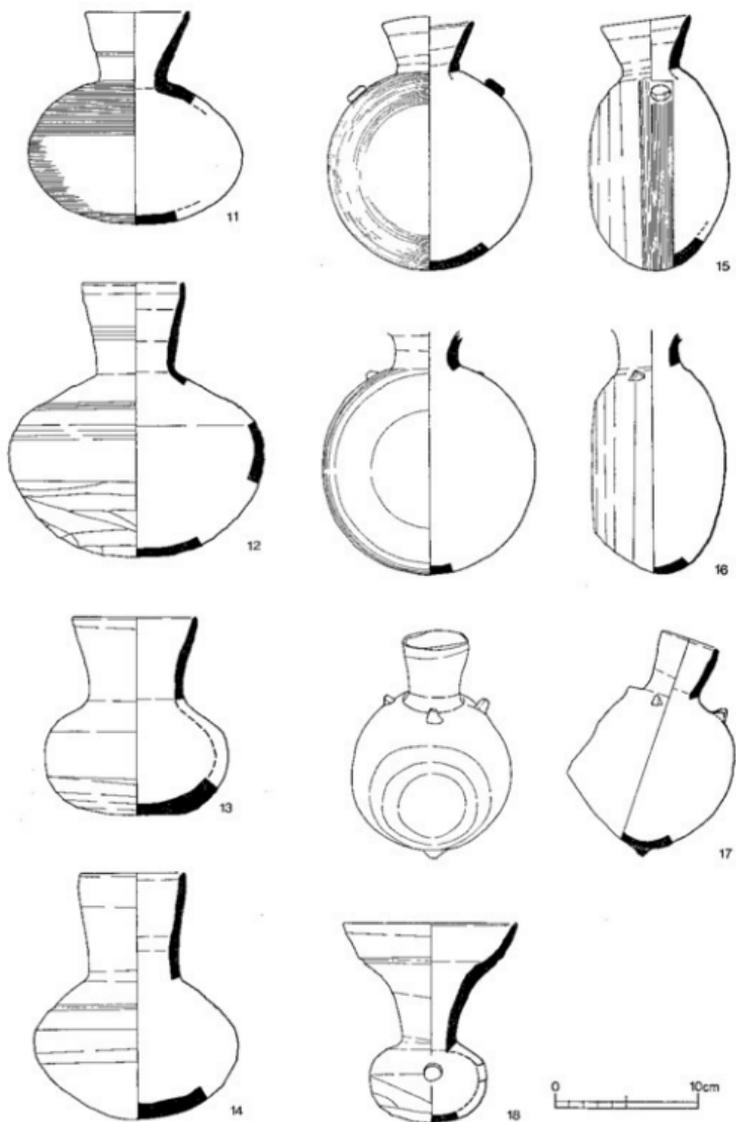
第24図 土器実測図 (1)

接合部分も一段の段を持つ。内面外面ともヨコナデが施されている。

壺 (11) は、楕円形の胴部に外方に広がる頸部を付けたもので、体部全体に強いカキメが認められる、口頸部は中央よりやや下に一条の凹線を持つ。口頸部は口縁端部に向かってほぼ直線的に延びるが、口縁端部は若干内傾している。焼成はやや軟質である。(12) はやや丸い体部に直線的な肩部を付けた壺である。体部外面下半部分は、ヘラ削り調整が施されている。体部と肩部の境付近には不明瞭な凹線が二条認められる。肩部にも明瞭な凹線が認められる。頸部は、外方へほぼ直線的に広がっているが、口縁端部に近づくると直立し、更に内傾して端部に至る。頸部中央のやや下で凹線が二条認められる。ヘラ削りの部分以外はヨコナデが施されている。(13) は、体部外面の下 $\frac{2}{3}$ に回転ヘラ削りが施されている。その他の部分は内外面にヨコナデが認められる。口頸部はやや外反した後、やや内彎気味に口縁端部に至っている。体部の器壁が厚く、重量がある。(14) は、楕円形の胴部にほぼ直立する頸部を付けた壺である。焼成は軟質で、調整は不明瞭であるが、体部は不定方向のヘラ削りではないかと思われる。体部と肩部の境付近は回転ヘラ削り、それ以外の部分はヨコナデではないかと思われる。口頸部の下半分はほぼ直立し、その後やや外方に広がった後、口縁端部はやや内傾している。

提瓶 (15) は肩部にボタン状の把手を頸部の両側に1個づつ貼付されている。口頸部は外彎した後はほぼまっすぐ外方に延びている。体部外面には回転ヘラ削りが行なわれ、体部上方から肩部にはカキメが認められる。肩部中央の円板の貼り付け部分にはカキメは認められない。(16) は口縁部が欠損している。底部はヘラ切り痕が残る。体部外面の $\frac{2}{3}$ の部分は回転ヘラ削りがなされている。体部の回転ヘラ削り部分とヨコナデ部分の境付近で、口頸部の左右に乳頭状の把手が1個づつ貼付されている。

双口壺 製作技法は提瓶と全く同じであり、壺の口頸部を取り付ける部分に円板を貼り付け寒いだ後、体部に口頸部を取り付けたものである。普通の提瓶がやや扁平な壺の胴部を使用



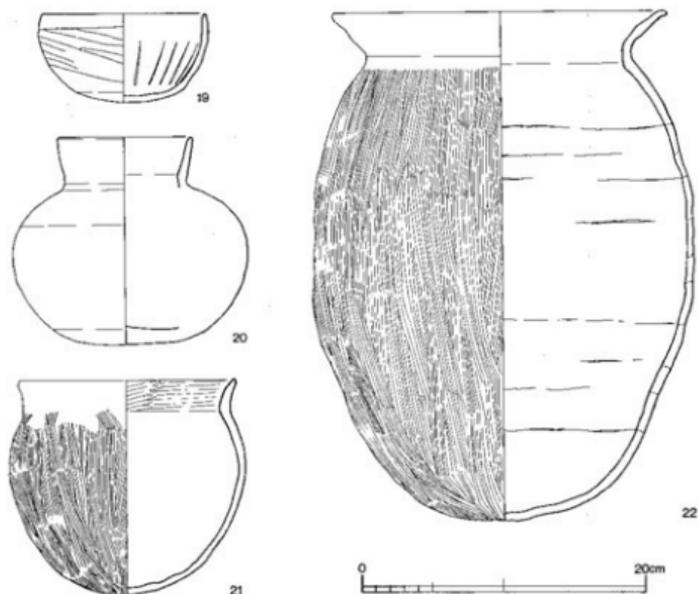
第25图 土器実測图(2)

しているのに対し、(17)は幅に対して比較的高さのある壺の胴部を使用している点が特徴的である。口頸部は焼けひずんでいるが、やや外反して立ちあがり、口縁付近で内彎したのではないと思われる。底部一面に何かが剝離した痕跡が認められる。これは焼成前あるいは焼成時に起こった事である事は、底部一面に自然釉が認められる事でも明らかである。何が剝離したかは不明であるが、(17)と同じものが接合していたと考え、双口壺という名称を用いた。口頸部の周囲3ヶ所に乳頭状の不定形のつまみを付けている、実測図の下方に見られるつまみ状のものは、自然釉が集まったもので、意図的に貼り付けられたつまみではない。

碗 (18)は胴部外面下半分にヘラ削りが施されているが、底部は更にナデが施されている。頸部は緩く外反して上方へのび、外面に一条の段を持った後、やや内傾しながらまっすぐ延び口縁端部に至る。胴部上半分と口頸部は全てヨコナデが施されているが、口頸部のうち外反する部分の内面は、ヨコナデの上にナデが認められる。

b 土 師 器

杯 杯(19)は底部から体部にかけて丸く、やや外方へ広がるように作られ、口縁端にかけては肥厚し、やや内傾する。体部外面はヘラ磨きが認められる。底部は磨滅しており調整は不明であるが、同じくヘラ磨きが施されていたのではないと思われる。内面はやはり部分的



第26図 土器実測図(3)

に磨削しているが、底部より口縁の方向へ暗文が認められる。

壺 (20) は胴部外面下半分の一部にヘラ磨きが認められるが、壺全体を見ると磨滅あるいは剝離している部分が多く、調整は不明である。胴部下半分の一部に黒斑が見られる。口頸部はやや短めものが付き、外へまっすぐ広がりながら口縁端に至る。胴部の中心と口頸部の中心がずれているのも特徴である。

壺 (21) は外面の頸部より下に細かいハケメを認める。内面は指で成形した後、ナデを施している。口縁内面には粗いハケメが認められ、その上にヨコナデを施している。口縁は基部より外彎して口縁端部に至っている。(22) は長胴型の壺で外面には口縁部より下にハケメを施している。内面は指で整形しているが、口縁は基部より短く直立した後、外方へ広がり端部は外彎して終わっている。全体的にいびつであり、長径21.6cm、短径20.8cmを測る。

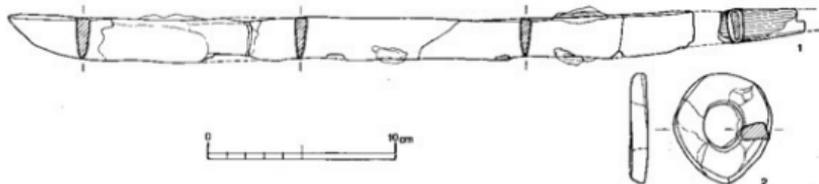
(2) 鉄 器

鉄器は、総数10点出土している。(刀と鋤は離れて出土しており、これを数えると11点となる。) 全て玄室出土である。出土状態でまともではなく、一部の鉄器を除いて移動している可能性も考えられる。土器内から出土した鉄の茎(9)はもちろんのこと、刀(1)は原位置を保っていたと思われる。他は、鋤で代表されるように遊離しており、敷石の石と石の間や敷石の上から出土している。

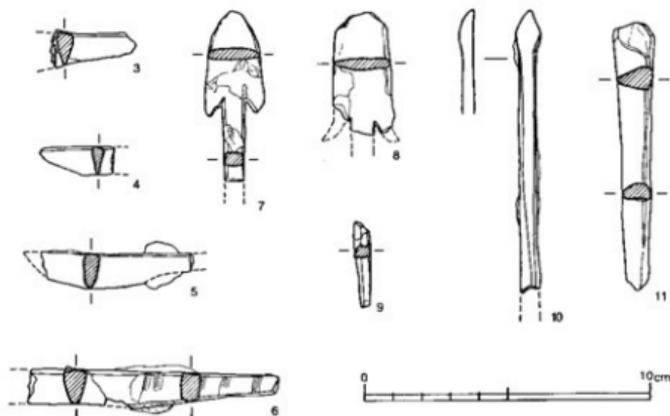
(1)は刀で、鍛造による地金の割れが著しい。錆化もかなり進んでいる。出土時は鋒が動いており、鋒から13cmが残りの刀身と重なっており、早く破損していたことがわかる。茎も刀身と重なるように出土した。木質を残した茎は一部しか残っていないが、刀身はほぼ完全に近いものと思われる。残存長で36.4cmを測り、やや反りを持つ刀である。棟は0.6cmで、茎には木質が残存している。錆を含めた総重量は、237.6gである。

(2)は、刀の鋤で倒卵形をしている。(1)の鋤になるものと思われる。3つに分割して刀身より石室中央部で出土した。最大長6cm、幅5.1cm、厚さ0.8~0.9cmを測る。孔径は、上下2.3cm、幅2cmと刀身の幅2cmと合致するものである。

(3)(4)(5)(6)は、刀子で全て石室奥半から出土している。(3)(6)は刀周辺から、(4)(5)は右側壁近くから出土している。(3)(6)は、茎とともに木質を残している。(6)はヨコ



第27図 鉄器実測図(1)



第28図 鉄器実測図(2)

方向の木質の上にタテ方向にも巻いているのが観察出来る。(4)は刃先部分で、1.7gと軽量である。(5)は刃先基部ともに欠失しているが、全形を想像出来る刀子である。残存長4.8cmと小形で復原しても6.5cm程度しかないと思われる。極めて小さいもので、ミニチュアかもしれないが小形品としての類例はある。茎が長く伸びるものと想定すれば、片刃の鉄鏃の形状にもなるが、可能性は薄いだろう。

(7)(8)(9)は、鉄鏃である。(9)は茎の基部で、土師器杯(19)の中からという興味ある出土状況の鉄鏃である。断面長方形になり、(7)(8)の茎のタイプとの相違はない。(7)(8)とも広根式の鏃で(8)は反りを有するものであろう。

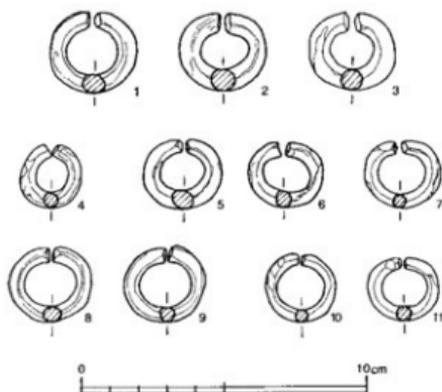
(10)は、錆着しているが鉋であろう。残存長10cm、幅0.6cmと細身である。先は0.9cmと広がった1.5cmの長さの刃先となる。全体的に反りはない。

(11)は、不明鉄器で長さ9.4cm、重さ12.6gを測る。頭に最大幅を持つ。1.4cmから徐々に細くなり、尖らそうとしているようだが鋭い先ではない。幅広なことから鉄鏃とは思えない。形状から龍子向イ山2号墳で出土している鉄釘に似たものかとも考えたが、釘とすれば明らかな頭部がない。縦に細かい亀裂が多く入っている。して推定すれば、鏃の機能に近いものと思われる。鏃か釘の可能性を求めたいが、一応不明鉄器としておく。

(3) 耳環

耳環は、11個出土しており、全て玄室内出土である。玄室内全域に散らばっているが、おおまかに奥壁右隅、玄室中央、袖部付近の3ヶ所に分けられる。

11個の保存状態は、まちまちである。全て銅芯であるが、白く軟弱になって残存状態の劣悪なものから、緑青がふいているものの保存状態の良好なものまである。総体的に箔は剥がれて



第29図 耳環実測図

おり、金箔か銀箔の判断を下せないものが半数以上ある。明らかなものは銀環2点だけで、銀環1点と金環2点もほぼ間違いないものと思われる。11点中6点は不明だが、残存状況から見てほとんど銀環になろうかと推定している。近くの籠子向イ山古墳群の耳環の状態を考慮して考えても銀環の可能性が高いものと思われる。特に、芯が白く脆弱化したものは銀環であろう。

これらが金箔か銀箔かの判断

を迷う最大の理由は、箔の剥離が著しいためであるが、箔が黒くなっているものが多くある。二次的な火を受けたために黒くなったものと思われ、石室再利用時の火によるものであろう。

耳環は径3cm前後で厚みのある重量感のあるやや大形なもの3点と径2.5cm~2.8cmと中形のもの5点、そしてやや小形でやや軽量の3点に分けられる。重量は箔の残存度で数値が大きく変わるようであるが、傾向は窺えよう。芯の細い精巧な耳環は含まれない。やや大形のものの方が、作りは丁寧である。(4)だけは不定形で縦長の楕を受け異質である。簡単に円形に曲げたような作りで下半は円形だが上半はやや先が尖り気味になる。そのため内側は端部が接しかかっているが外側は大きく開いている。平面で見て三角形の空白が生じている。その他の10点は、ほぼ円形であるが全てヨコ方向に最大長を持っている。

形態差を主として重量などから考えて、3組の対を抽出出来る。(5)―(6)、(8)―(9)、(10)―(11)の3対である。(1)―(2)―(3)も3点のうち2点是对になるものと思われる。(4)は異質なもので対は見出せない。

このセットを出土状態から見てみると、3対とも同地域から出土している。出土状況を加味して考えると、(1)―(2)―(3)の3点のうち対をなすのは(2)―(3)と考えられそうである。当初、遺物は少なからず原位置から動いていると考えていたが、耳環の出土状況を見ると大きく移動したものは思われない。耳環のセット関係だけから考えると7組の耳環があった考えるのが妥当であろう。

2. 石室再利用時の遺物

古墳時代以外の土器については、石室再利用時のものをはじめ多時期にわたる土器が出土し

ており、また混入と思われるものも含むが、まとめて説明を加える。

a 須恵器

高台付杯(1)

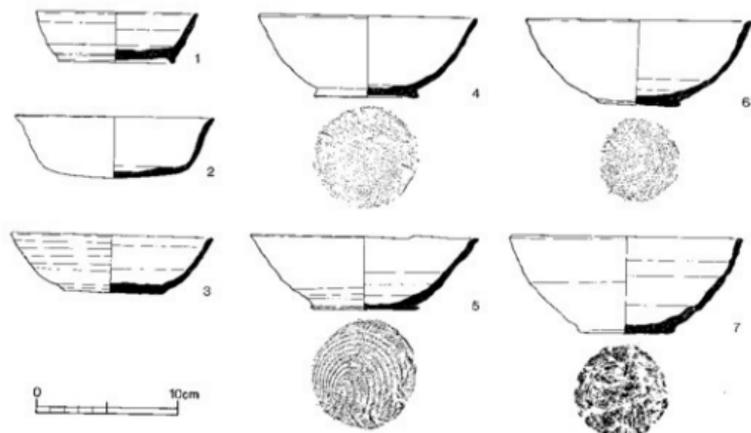
口径11.3cm、器高3.5cmを測る小形の製品である。ほぼ底部端に貼り付けられた高台は、端部がやや丸味を帯びた断面逆台形状を呈し、シャープさを欠く。高台と体部の境は稜をなし、体部は斜め上方に直線的にのびる。外底部をヘラ切りそのまま残しているが、体部下半半程に回転ヘラ削り調整を施しており、ロクロの回転方向は時計廻りである。

杯(2・3)

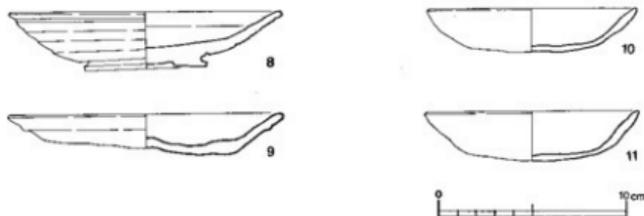
(2)は、体部と底部の境が丸味を帯び不明瞭で、底部はややふくらみをもつ。体部の立ち上りは急で中位から外反し、口縁端部を丸くおさめる。胎土には精選された粘土を用いているが焼成は非常に甘く灰白色を呈する。(3)は(2)に比べて体部の外傾度が強い製品である。体部は平坦な底部から内彎しつつ立ち上り、底部との境に段を有する。淡青灰色を呈し、焼成は堅緻で、ロクロの方向は時計廻り。(2)(3)ともに外底部に板目状圧痕を有し、内底部に指頭による2本の強いナデの痕跡を残す。

碗(4~7)

回転糸切り手法による平高台をもつ碗であるが、器形、法量、底部のつくりなどに差異が見られる。(4)は、外方に若干張り出し高く安定した高台を有する。底部を切り離した後、高台



第30図 石室再利用時の遺物 (1)



第31図 石室再利用時の遺物 (2)

側面をヘラあるいは指でていねいに整えている。若干丸味をもつ体部と丸くおさめた口縁部をもつ。(3)と同じく、外底部に板目状圧痕、内底部に2本の強いナデの跡が見られる。(5)は、口徑に対して器高が低い浅い器形である。高台は(4)ほど高くなくつくりも雑で、側面にはみ出した粘土をそのまま残す。底部の糸切りの痕跡は非常に粗い。体部はほぼまっすぐ斜め上方にのび、口縁端部をわずかに外方へ折り曲げる。また口縁部上端の1ヶ所に段がみられるが、粘土紐巻き上げの最後の段階の接合痕が残ったものであろう。(6)、(7)は、器高が高く深みのある製品である。高台は非常に低く、つくりも雑で、また(4)、(5)に比べて径が小さくなっている。体部の丸味は強く、(7)ではさらに上位で屈曲する。内外面ともロクロミズビキ痕と思われる凹凸が激しい。(4)、(5)は、淡青灰色を呈し胎土も精良で硬質に焼上げられているが、これに対し(6)、(7)は胎土に微砂粒を含み、焼成は甘く淡灰色を呈する。さらに口縁部内外面には、黒灰色に変色した重ね焼きの痕跡がみられる。

b 緑釉陶器

皿(8)

「鉦ノ目」高台を有し、体部と高台の境目と口縁部外面直下に沈線を施す。外面体部下半場と臺付き部を回転ヘラ削りしている。土師質に焼成されており、淡黄白色の胎土に淡黄緑色の釉が全面に薄くかかるが、釉の剝離している部分が多い。

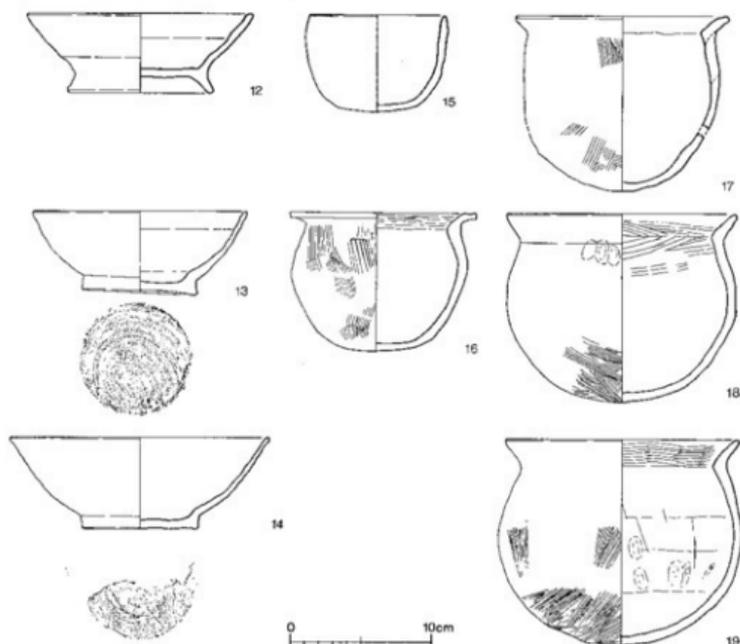
c 土師器

皿(9)

体部と底部の境が明瞭でなく、体部は直線的に大きく開き、口縁部近くで段を有する。内底部周縁がわずかに肥厚し、底部ヘラ切り。全体にゆがみが激しい。

小皿(10・11)

底部が若干ふくらみをもち、器壁を薄く仕上げる。体部は、底部からそのまま続いて大きく開き、上半を肥厚させている。外底部と体部外面下半を雑な指押えにより整形し、体部内面と口縁部はヨコナデ。内底部は、(11)ではナデ、(10)は小口幅2cm程の板状の工具で整えている。



第32図 石室再利用時の遺物 (3)

碗 (12~15)

(12)は、貼り付け高台を有する浅い器形の製品である。高台は底部端に付き、ハの字形に強く外向し、端部を丸くおさめる。体部は外傾度が強く、内彎しながらのび、体部と高台の接合部がゆるやかな曲線を描く。全体をヨコナデによって仕上げたと思われるが、器面の磨滅が著しい。(13)、(14)は、平高台を有する碗である。分量に若干の違いはあるものの、ともによく似た器形を示し、円板状の高く安定した高台と丸味をもつ体部とからなる。内底部は大きく凹み、体部との境に段を形成する。高台側面と体部をヨコナデ調整しており、底部は、(14)がヘラ切り、(13)は回転糸切り。赤褐色～黄褐色の明るい色調をなす。また(14)は、器壁を薄く仕上げている。(15)は、平坦な底部から内彎しつつ立ち上る体部とほぼ直口の口縁部をもつ。胎土には砂粒を多く含む黄褐色を呈する。器表は磨滅が著しいが、外面にヘラ磨き、内面にヨコナデの痕跡を残す。

壺 (16~19)

(16)は、口径13.1cm、器高9.8cmの小ぶりの製品である。底部はわずかに平坦で、胴部は上位で強く屈曲する。口縁部は外反し、さらに中位で水平に折れ曲がり、端部を上方につまみ上げ

ている。体部内面をナデ、口縁部外面はヨコナデ、その他をハケメ調整しているが、細組2種類のハケを用いており、口縁部内面と胴部屈曲部以上は粗いハケ、それ以下は両者を併用している。(17)~(19)は、口径15~16.4cm、器高12.5~14.5cmの寛で、いずれも頸部が肥厚し、「く」の字状に短く外反する口縁部をもつ。胴部が張るもの(18)、(19)と、張らないもの(17)がある。体部内面は口縁部との境に稜をなし、(17)、(18)はナデあるいは横方向のハケメ、(19)は、ヘラ状工具で平滑化している。体部外面はハケメで、頸部に指押え痕を残す。底部を除いた外面全体にススが著しく付着している。

№	種類	出土位置	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	刀	玄室中央	41.9	2.3	0.7	—	
2	鏝	〃	5.9	5.2	0.8	34.8	
3	刀子	〃	2.9	1.3	0.5	2.6	木質残存
4	刀子	〃	3.1	1.0	0.4	1.7	
5	刀子	〃	5.3	1.3	0.5	6.0	ミニチュア
6	刀子	〃	8.7	1.3	0.8	15.2	板皮?を巻いている
7	鏃	〃	6.0	2.1	0.4	7.0	
8	鏃	〃	4.3	2.1	0.4	7.8	
9	鏃	袖部土器内	3.0	0.6	0.4	1.4	土器№19内
10	鏃	袖部	9.9	0.9	0.5	8.7	反りはない
11	不明鉄器	奥壁前方	9.4	1.4	0.8	12.6	縦に亀裂

第1表 鉄器観察表

№	種類	出土位置	最大径 (mm)	最小径 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	不明	奥壁右隅	30.1	28.0	7.6	20.0	
2	銀環?	袖部付近	31.2	27.1	8.5	25.0	保存状態良好、雷割線
3	銀環	袖部付近	29.8	26.2	7.4	25.4	箔黒くなっている
4	不明	玄室中央	22.9	21.8	6.2	7.1	円形にならない不定形
5	金環?	袖部付近	27.7	24.5	7.7	13.6	箔黒くなっている ⅴ6と対
6	金環?	袖部付近	26.5	22.8	6.0	9.2	〃 ⅴ5と対
7	銀環	玄室中央	26.2	23.4	5.6	12.7	〃
8	不明	奥壁右隅	23.9	26.1	5.8	13.9	芯白くなっている ⅴ9と対
9	不明	奥壁右隅	28.1	26.2	5.8	11.9	〃 ⅴ8と対
10	不明	袖部付近	25.0	23.8	5.2	5.5	ⅴ11と対
11	不明	袖部付近	25.0	22.4	4.6	5.7	ⅴ10と対

第2表 耳環観察表

No.	器種・器形	胎土	焼成	色	法量 (cm)		特徴	備考
					口径	器高		
1	須臾器・杯蓋	色の微砂粒を含む	堅緻	(内)淡灰色 (外)暗灰色	14.6	4.8	天井部外面に回転へう削り、他は内外面とも横ナデを施す。大きく熱けひずんでおり、最小径14.5cm、最大径15.9cmを測る。口縁端部は断面三角形を呈する。	口縁部欠損
2	"	径2mm程度の白色砂粒を含む	"	(内)暗灰色 (外)"	15.1	3.9	口縁部が天井部より反外して延びる。天井部内面に同心円のアナケ具の痕跡を残す。天井部外面に回転へう削りが施され、他は同心円の痕跡がある部分以外、横ナデを施す。	口縁を若干欠くがほぼ完形
3	"	径1mm程度の白色砂粒を含む	"	(内)淡灰色 (外)"	14.2	3.7	天井部外面は回転へう削り部が部分的にナデを施す。他は横ナデが施される。天井部から口縁部にかけてやや薄手に作られる。口縁端部は直線に近く、あまり丸みを持たない。全体的に調整が揃う。	やや重んでいる完形
4	"	径3mm程度の小罫を少量含む	"	(内)暗灰色 (外)"	13.0	3.9	天井部外面は回転へう削りが施される。他の部分は横ナデが施される。	完形
5	"	内面に径1mm程度の白色砂粒を少量含む	" (天井部外面は軟質)	(内)淡灰色 (外)"	12.0	4.8	天井部外面は回転へう削りされており、ナデが若干認められる。その他は横ナデが施される。天井部から口縁部にかけて、ほぼ直線的に延びた後はほぼ垂直に下り、やや内彎して口縁端部に至る。口径に比べて器高が高い。	完形
6	須臾器・杯身	1mm以下の白色砂粒を含む 非常に密	堅緻	(内)淡灰色 (外)灰色～暗灰色	12.0	4.1	口縁の立ち上がりはほぼ直立する。体部外面下半部分はへう削りが施され、部分的にナデを認める。底部外面はへう削り部が残り、部分的にナデを施す。他は横ナデが施される。	完形
7	"	0.2mm程度の白色砂粒を含む 非常に密	堅緻	(内)淡灰色～暗灰色 (外)暗灰色	12.0	4.8	口縁の立ち上がりが直線的に内傾している。底部はへう削り未調整、その他は横ナデが施される。底部の器蓋が厚い。	完形

第3表 古墳時代土器観察表(1)

第4表 古墳時代土器観察表(例)

No.	器種・器形	胎土	焼成	色	口径	法量(m)		特 徴	備 考
						口径	高		
8	須恵器・杯身	黒色粒を含む。径1mm程度の白色砂粒を含む	堅	(内)淡灰色 (外) "	12.6	3.5	口縁の立ちあがりかたがほぼ直立する。立ちあがりの長さが1cmもあり、器高に占める割合が大きい。底部外面はヘラ切り取を施す。その他の部分は横ナデが施される。	若干歪んでいる 完形	
9	"	内面に径1mm以下の白色粒を認め、外面に径2mm程度の白色砂粒が認められる	堅	(内)暗灰色 (外) "	10.2	4.4	口縁部の立ちあがりかたが内傾している。内面に体部と受部とを接合した溝生じた一条の沈線認められる。底部外面はヘラ切り取を施す。その他は横ナデが施される。	体部の1/4が外側から内側へ歪んでいる 完形	
10	須恵器・無蓋高杯	0.1mm程度の黒色粒を含む	堅	(内)黒褐色～黄灰色 (外)黄褐色～灰色	11.0	4.1 (推定杯部のみ)	底部から体部にかけて、内傾しながら外方に延び、その後直線的にやや内傾しつつ口縁端部に至る。底部と体部の境及び体部の途中で縁を持つ。	口縁部は破片 外面には自然蝕が認められる 完形	
11	須恵器・壺	長石・チャートの小石粒を含む	やや軟質	(内)灰色～黄灰色 (外) "	7.2	14.8	頸部全面にカキメを施す。口頸部外面中央に一条の凹線を持つ。口頸部はほぼ直線的に外に広がるが、口縁端部はやや内傾する。		
12	"	径1mm程度の白色砂粒を含む	堅	(内)暗灰色 (外) "	7.2	19.1	体部外面下半部分にヘラ削りを施す。体部と頸部の境、胃部中央、口頸部中央に各々2条の凹線を持つ。口頸部は外方に直線的に延び口縁端部にかけてやや内傾する。ヘラ削り部分以外横ナデを施す。体部外面に凹線ヘラ削り、その他は横ナデを施す。口頸部は、外反した後、やや内傾気味に口縁端部に至る。体部の器蓋が厚く、重量がある。底部には覆片が付着。	完形	
13	"	黒色粒を多く含む。径1mm以下の白色砂粒を含む	堅	(内) 暗灰色 (外) 暗灰色	8.5	13.8	口頸部は、外反した後、やや内傾気味に口縁端部に至る。体部の器蓋が厚く、重量がある。底部には覆片が付着。		
14	"	径1mm以下の暗灰色の砂粒を含む	軟	(内)灰白色 (外) "	6.6	17.2	体部外面下半分は、不定方向のヘラ削り、上半分は凹線ヘラ削り、他は横ナデと思われる。口頸部は直立した後、外方へ直線的に広がりが口縁部付近で内傾する。	口縁部欠損	

No.	器種・器形	胎土	焼成	色調	法量 (cm)	特徴	備考	
15	須恵器・提篋	径1mm程度の白色砂粒を少量含む	軟質	(内)淡灰色 (外) "	6.0	17.7	肩部にボタン状の把手を一對持つ。底部外面には肩部へ向けて削り、体部上部から肩部下半分の外面にはカキメが施される。口頸部は外側した後外方に直線的に延びる。底盤中央がややへこんでいる。	完形
16	"	径3mm程度の砂粒を含む 径1mm以下の白色砂粒を含む	堅緻	(内)暗灰色 (外) "	3.8	17.0 (残存高)	底部外面にへら切り痕を残す。体部外面下部に凹痕へ向けて削りが施される。口頸部の左右に乳頭状の把手を一對持つ。	口縁部欠損
17	須恵器・双口壺	径1mm以下の白色砂粒を含む	堅緻	(内)灰黒色へ暗灰色 (外)暗灰色	3.8	15.1	提篋と同様の製作技法による。底部外面に割離痕を認める。体部外面に2個の乳頭状のつまみを持つ。体部外面はへら削りではないかと思われる。肩部外面は横ナデが施される。口頸部はやや外反した後、内彎して肩部に至る。	自然釉が全体に見られる
18	須恵器・珠	径2~3mm程度の砂粒を含む 径1mm以下の砂粒を多く含む	堅緻	(内)暗灰色 (外)暗赤灰色	12.0 (肩部最大径 8.1 cm)	14.0	肩部外面は横ナデが施され、その他の部分については横ナデが施される。口頸部外面に一つの取を持つ。口頸部は底部より鋭く外反して上方へ広がり、段の所でやや内彎しながら、直線的に遊び端部に至る。	口縁部欠損
19	土師器・杯	径1mm程度の白色砂粒を含む	良好	(内)淡褐色 (外) "	11.4	6.3	底部外面は磨滅している。体部外面もほとんど磨滅しているが部分的にへら磨きが見られる。口縁部はやや肥厚しており、内彎する。体部内面には底部から口縁の方向へ刺文が見られる。	完形
20	土師器・盞		良好	(内)淡黄褐色 (外) "	9.1	14.6	肩部外面下半分の一部に部分的にへら磨きが見られる。全体的に器壁は磨滅あるいは磨滅している。口頸部は直立した後外方へ直線的に延びる。肩部に黒塗が見られる。口頸部の中心と肩部の中心がずれている。	ほぼ完形

第5表 古墳時代土器調査表 (8)

No.	器種・器形	胎土	焼成	色調	法量 (cm)		特徴	備考
					口径	器高		
21	土師器・甕	チャート・長石などの砂粒を含む	やや軟	(内) 淡赤褐色～黄褐色 (外) 灰褐色～棕色	15.2	15.2	外面の頸部より下に細かいハケメを施める。内面は指で成形後、ナデで仕上げ。口縁部内面には粗いハケメを施し積ナデをその上に施す。口縁は基部より外側して基部に至る。器形はいびつであるが薄く作っている。	
22	"		良	(内) 淡黄褐色 (外) 淡黄褐色	長径21.6 短径20.8	36.2	外面は頸部より下にハケメを施す。内面は指で整形しているが、粘土帯の跡が目が見え残している。口縁は短く直立した後、外方へ直線的に延び、更に外側して基部に至る。口縁部には粗い積ナデが施される。全体的にいびつである。	

第6表 古墳時代土器観覧表(4)

No.	器種・器形	胎	土	焼成	色調	法量 (mm)		特	徴	備考
						口径	器高 (高台除)			
1	須臾器・高台付杯	砂粒含む		堅	暗灰色	11.2	3.5	8.2	底部へラ切り、外面高台を削り	ロケロ時計廻り
2	杯	精		軟	灰白色	13.8	4.3	10.1	内底部ナズ	"
3	杯	砂粒含む		堅	淡青灰色	14.0	4.0	6.7	"	"
4	平高台碗	精		"	"	15.1	5.7	7.3	外部 縦目状狂裏	"
5	"	"		"	"	15.7	5.2	7.6	底部回転糸切り、内底部強い2本のナズ	口縁部上端に段
6	"	微砂粒を含む		軟	淡灰色	15.8	6.8	6.8	"	口縁部に黒灰色の重ね焼き
7	"	"		"	"	15.5	6.0	5.9	"	口縁部に黒灰色の重ね焼き の裏面 外面磨耗
8	線刷陶器・皿	砂粒を少し含む		良	土 淡黄白色 黄 淡黄緑色	14.5	3.3	6.5	底ノ目高台をもつ、底部下半%と高台笠付 き部を回転へラケズリ	半分近く軸が割離している 口縁外面及び高台と体部の 境に北線
9	土製器・皿	微砂粒を含む		良	赤褐色	14.7	1.4~2.1	10.1	底部へラ切り、体部と内底部ヨコナズ	ゆがみが強い
10	小皿	精		"	淡赤褐色	11.0	2.3	6.5	外底部と体部下出部を削り 内底部ハケメ状工具で調整	口縁部外面に段をもつ
11	"	微砂粒を含む		"	淡赤褐色	11.2	2.6	6.9	内底部ナズ	手づくね成形
12	高台付碗	微砂粒わずかに含む		"	灰~赤褐色	15.9	5.6	10.2	全面ヨコナズ	ハの字形高台を付す
13	平高台碗	"		"	淡赤褐色	14.9	5.8	8.1	底部粗い回転糸切り	内底部大きく凹む
14	"	精		"	淡黄褐色	18.2	6.5	8.2	底部へラ切り、内底部ナズ	ロケロ時計廻り
15	碗	砂粒多く含む		やや軟質	黄褐色	9.6	6.8	4.5	口縁部内面横ハケメ	器表磨耗
16	壺	砂粒少し含む		良	淡黄褐色	13.1	9.8		体部内面ナズ、外面粗組2種のハケメ、	外周部厚
17	"	精		"	灰 福色	15.0	12.5		口縁部内面ハケメ、頸部外面磨損	一部を受け難い
18	"	砂粒含む		"	外二面黄褐色	16.2	13.3		体部内面指押さの後のラ状工具で平滑化、	"
19	"	"		"	内一黄灰色	16.4	14.5		口縁部内面横ハケメ	"

第7表 石室再利用時遺物調整表

V 龍子長山2号墳の測量調査

龍子長山1号墳の位置する長山は、南北に主軸を持つ北へ向かって細長く伸びる尾根である。その丘陵上に1号墳は存在するが、同じ尾根上に同じ横穴式石室を主体とする2号墳が存在している。丘陵は長く伸びており、古墳が占地しそうな箇所は、北側の電力の鉄塔の部分などがあるが、古墳は確認出来ない。ただ、鉄塔周辺は石塊が露出したり、石材が散乱している。北側の方が石の露出が顕著である。鉄塔周辺は、古墳が存在した可能性が考えられるが、現状では認められない。そのため、長山丘陵上は2基の同質の古墳が存在しているにすぎず、龍子長山古墳群は、2基で構成されていることになる。

位置 本墳は、長山1号墳の位置から南々東方向の尾根上、一度少し下り再び登りはじめた場所、1号墳と類似した緩傾斜地に位置する。1号墳と直線距離で、約90m離れている。

現状 本墳は横穴式石室墳である。羨道の北側一部と奥壁の上方及び、天井の最も奥が開口している。墳丘の土が、開口部から侵入し、石室内はその埋土のため床面を確認できない。また奥壁のものとと思われる石材が石室内に崩れ落ちている。

外形 径約14mを測る円墳である。北側は、人工的に掘り下げたらしく、高さ約3mを測る。南側は登り斜面にあたるので、1号墳と同様に、墳丘を明確にするためと思われる浅い掘り割りが認められる。比高は約2mである。また、天井石、羨道入口付近の石材及び



第33図 龍子長山2号墳墳丘（開口部）



第34図 龍子長山2号墳墳丘（奥壁側）

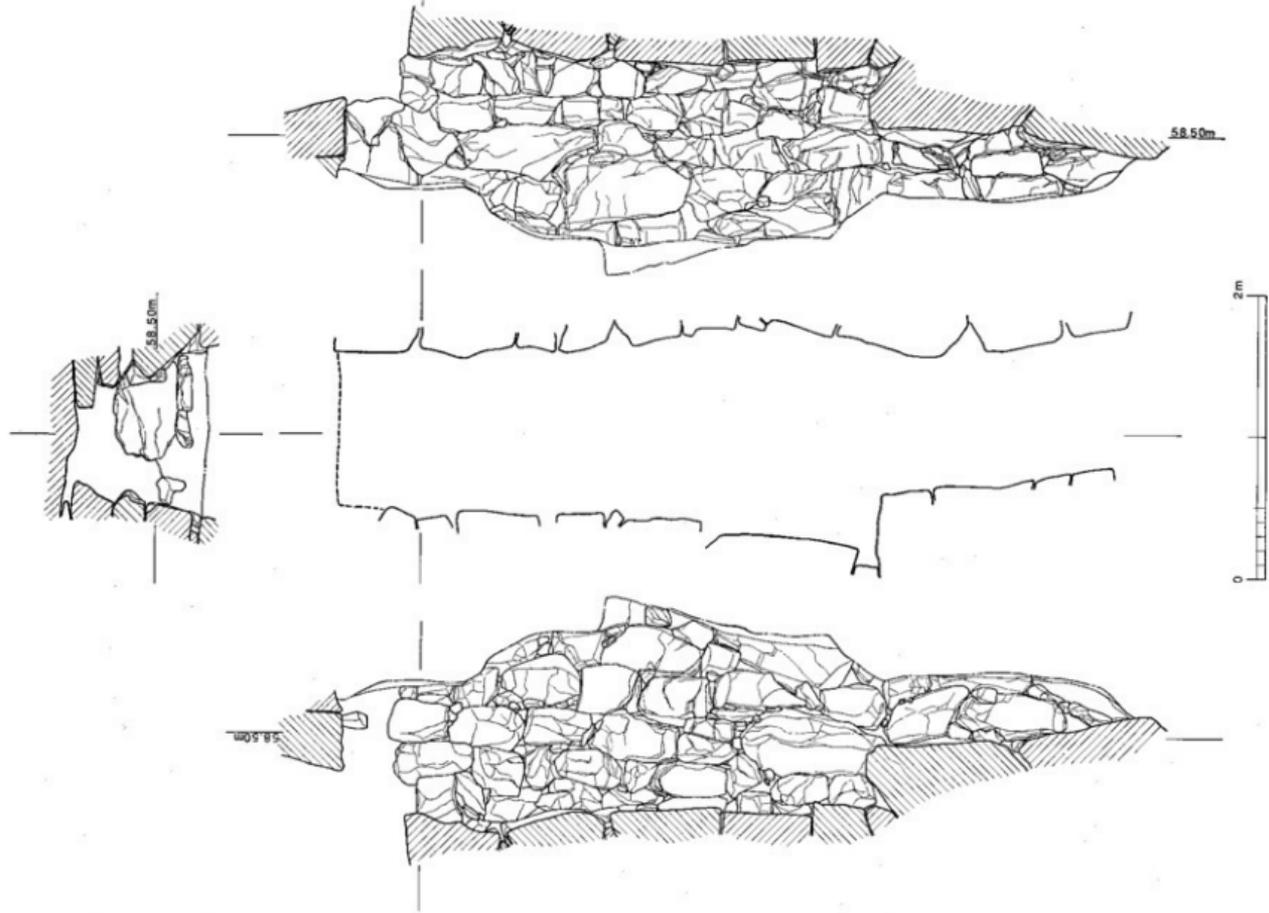
玄室奥壁が露出している。

内部構造 主軸を $S31^{\circ}E$ 方向に取る右片袖式横穴式石室である。石室全長は推定で $6m$ 強と比較的小規模で、玄室部は長さ $3.79m$ 、幅は奥壁部で推定 $1.10m$ 、奥壁から $2.89m$ で最大幅 $1.50m$ となり、玄門部では $1.45m$ を測る。1号墳に比べ細長い構造である。羨道部は現状で長さ $2.18m$ 、幅は玄門付近 $1.05m$ 、玄門から羨門方向へ $1.45m$ の所で、 $0.98m$ を測るが、北側に曲っているのが特徴的である。石室内部に流入した土砂については先に述べたとおりであり、現状での玄室の高さは、 $1.30m$ 程度であるが、 $0.2m$ 程高かったと考えられる。羨道部の高さは埋土のため不明である。



第35図 龍子長山2号墳地形測量図

側壁を構成する石材は、基本的には横長の大型 ($0.4 \times 0.7m$ 程度) の物を下に置き、上へ行くほど小型 ($0.25 \times 0.4m$ 程度) の山石を用い、上段はより小型の横長の石材を使用する傾向がある。側壁は小型の栗石を混用し5段まで確認でき、概して南壁の石材の方が大きい。奥壁については露出している石材の下に小型の石を確認できるのみで埋土中に2段程度、また上に1、2段積まれていたであろうと考えられる。



第36圖 龍子長山2号墳石室実測圖

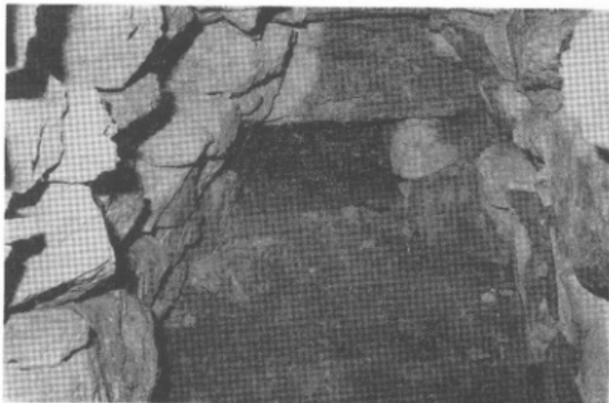
天井石は、玄室で5枚、羨道で2枚が原位置を保っており、羨道部奥側の石材は大きい
ため見返り石はない。また玄室の最も奥に位置すべき天井石については付近にもそれらしい石材はなく不明であり、羨道部にももう一枚あったかもしれない。

出土遺物 不明

築造時期 不明



第37図 龍子長山2号墳石室（奥壁）



第38図 龍子長山2号墳石室（玄門）

VI ま と め

1. 龍子長山1号墳の位置づけ

龍子長山1号墳は、横穴式石室を内部主体とする円墳である。古墳の規模や石室の構築法など後期の一般的な横穴式石室を主体部とする古墳であると言える。

当古墳の特徴を一言で表わすなら、古墳本来の埋葬状況や特徴的な出土遺物ではなく、古墳の再利用であると言える。しかも9～12世紀の長期間横穴式石室を使用し続けた例は、珍しいものと思われる。石室の再利用が龍子長山1号墳の特徴であるが、まずは調査成果を項目別に分け、次に石室の再利用を考えてまとめとする。

立地 通称三ツ塚山塊には10数基の古墳が存在するが、三ツ塚1・2号墳、鳥坂1・2・3号墳を除くと後期の古墳である。後期の古墳でも尾根上に立地するものと山麓斜面に占地する古墳の二者がある。龍子長山1号墳は、前者の尾根上に立地している。尾根上ではあるが、鳥坂4号墳のような緩やかな尾根斜面ではなく、平坦に近い尾根上に立地している。また、鳥坂4・5号墳のように高位置に築いていない。可視範囲は、西方向に限られ、南山の奥谷から片島方面と龍子向イ山を通して的場山方面を眺望出来る。しかし、南方は三ツ塚山塊に遮られ、正東方向は見る事が出来ない。

占地する長山が、瘦尾根で南北に非常に長く伸びているため、斜面に古墳を築きにくいということも考慮すべきであろう。龍子向イ山古墳群中でも5号墳だけは、尾根上に立地するが別の性格を考えることは困難で、同種の理由によると考えた方が妥当である。そうするなら、標高の比較的低い位置に占地する龍子長山と龍子向イ山の両古墳群は相似た性格の古墳群であり、鳥坂4・5号墳とは性格を異にすると考えられる。

墳丘 墳形は通常の後期古墳と同じく径10m余の円墳である。尾根上に立地しているため自然流失や本墳石材採取という破壊の難に遭遇しているため墳丘規模は算出出来ない。石室の規模から推定して、高さ3m程度の墳丘はあったであろうと思われる。

墳丘築成は、2種の土を交互に使うことを基本としている。地山土である赤褐色土と地山土に自然堆積した山土のうち、やや粘性のある黄褐色砂質土の2種の土を用いている。黄褐色土の方は、有機質土を混合しており、墳丘のしまりを良くするためであろう。

尾根上の標高の高い方だけ、人為的な非常に浅い掘削状の溝を確認した。墳裾を面する意図とともに墳丘を高くする（とくに視覚的に）意識が働いている。広義の外部施設とも考えられよう。この掘削状の溝以外は、墳丘に手を加えた事実は認められない。埴輪列・列石などの外部施設は存在しない。

内部主体 主体部には、横穴式石室を採用している。三ツ塚山塊の後期古墳は、全て横穴式石室を内部主体とする円墳であるという共通点を有する。石室規模は、全長6.5mの左片袖

の形式で、玄室 3.3m、羨道 3.2mを測る。石室の幅は、奥壁で1.4m、玄門1.25m、羨門1.3m、玄室最大幅1.6mである。袖を形成する個所に最大幅を与えた石室で、袖幅は0.35m。奥壁と羨門との数値に近いという特徴を持つ。玄室長は石室長の半分を占め、開口方位はS40°Eと南東方向に開口する。2基から成る龍子長山古墳群のもう1基の2号墳と開口方向は同じで、石室規模も大差ないと思われる。

石材は、摂西平野の南縁の山塊の基盤層である粘板岩中に含まれるチャートを使用している。北東から南西方向に岩脈を持ち、半田山・養久山・三ツ塚山塊と分布する石材である。摂保郡揖保川町半田から鶴野市揖西町土師まで分布するが、古墳の立地する長山丘陵からも採取されるので、至近距離である同一山塊中で賄ったものと思われる。

石室構築における用石法は、奥壁と袖を形成する2石の3石が縦積みになっているが、他の石材は原則的に横積みしている。縦列に配置するのは袖石に限られているのは、一般的な傾向で大形の石室では奥壁との中間にも縦積みする石材を配石している。縦積みした3石は、他の石材掘り方よりも深く掘られている。石室構築に際して、これら3石は石室の基本となる石と言えよう。石材の使用は、基底石の方が上段に比べると確実に横位置に配されている。上段の石は、一部小口積みに近い用い方もあり、石室の安定を図ることに重点をおきつつ、石材を最も有効なように使用している。本石室は、裏込めの栗石をほとんど使わない。小石を多く詰めるより、人頭大の石を1石石材間に詰めて安定を図っている点に特徴がある。石材は、一部削面を内側に向けた石も使われているが、大半は自然石を使用している。

奥壁は、基底石でもある巨石と他の1石の2石しか残存していないが、側壁の残存高や石室規模から想定すると、巨石の上に1・2石しか積まないであろうと思われる。巨石の上に1段か2段の石を積み奥壁を構成したと思われる。巨石は、立面で正方形に近いもので、安定感を与える奥壁である。平面で1石で奥壁を形成している点は、大形墳を意識したものであるか。龍子向イ山古墳群では、全て2石から奥壁は構成されている。

石室の再利用 龍子長山1号墳の最大の特徴は、石室の再利用である。石室内や墳丘から後世の土器が、土器片や1個体出土することは多々あるが、本墳のようにまとまった状況で遺構として検出した例は寡少例であろう。また、9世紀から12世紀にかけて、石室が使用され続けた点も縁袖を伴う10世紀代の明瞭な使用例とともに貴重な資料となろう。古墳自身は、6世紀末に築造され、7世紀初頭まで追葬が行われた古墳であるが、約200年経った9世紀始めに1点の土器が石室内に完形で置かれていた頃から、明らかな物証として石室は使用されていたことが判る。この時期は1点の土器だけで、明らかなことは言えないが、次の10世紀になると遺構としての姿を我々に与えてくれる。

10世紀代の石室の使用は、(石室主軸に沿って舟底状になっていた可能性も考えられる)火を焚いた上に土器を9個体以上置いたものである。石室中央で行われ、炭、焼土の端は玄門手前まで広がっており、石室を意識したものと考えて大過ない。土器は、須恵器、土師器、縁袖を含んでいる。個々の土器による時期差が考えられるかもしれないが、調査結果では、同一面

から出土しており、同時期の石室内での祭祀に伴う一括遺物と考えられる。土器の時期差はあっても、使用時期は同時期と考えられ、10世紀代でも新しい時期が与えられよう。火を用いた行為は石室を十分に意識して行っている。骨片は見出されず、土器の出土状態からも埋葬とは考え難く、石室における火を用いた祭祀の証左と思われる。

11世紀の終わり頃の使用は、石室の袖部で行われ、やはり横穴式石室を十分認識してのことと思われる。須恵器碗が2個伏せた状態で袖部に置かれていた。この事例だけで、性格を問うことは困難であろうが、前代の例を鑑みれば、同様の性格を想定するのが妥当かと思われる。

古墳の再利用例は、今まで余り認識されなかったため、見過ごされがちであったが、近時間藤原氏によって研究がなされている。⁽¹⁾それによると古墳の再利用例は、大和・河内・摂津・山城の畿内に多いが、事例は全国に広がる。横穴式石室の再利用は、墳丘の再利用より100年近く遅れはするが、築造時期を勘案すると築造から再利用までの期間は同程度となる。

兵庫県下でも古墳から後世の遺物が出土している古墳は、比較的多く摘出出来る。しかし、大半は遺物が遊離した状態で、盗掘時期や開口時期を示すもので再利用例ではない。再利用例と考えるものに2つの形式があると思われる。龍子長山1号墳のように明らかに遺構もしくはそれに準拠する出土状況を示すもの。もう一つは、緑釉や土馬・青磁など特殊な遺物を包蔵した古墳の例である。

後者の特殊遺物を出土した古墳は僅少である。本例以外では、宝塚市雲雀丘3丁目に所在する雲雀山東尾根古墳群C支群2号墳⁽²⁾と出石郡出石町管内所在の下敷地下式横穴3号横穴の2例が挙げられる。雲雀山東尾根古墳群C支群2号墳は、同古墳群中最大規模の古墳で径19mの円墳で、群中の低い位置に立地する古墳である。石室床面の袖部近くで出土しており、猿投窯産の灰釉把手付瓶で10世紀中葉に比定されている。下敷地下式横穴3号横穴では青磁碗が出土している。完形品を半載された状態で2ヶ所から検出された。埋葬面と同一面とも言われるが、出土遺物の示す時期的差異は明らかで、横穴の再利用と考えるのが妥当であろう。同安楽系の舶載品と言われている。

遺構として把握できる中には主体部を利用した例と墳丘および墓域を利用した例にさらに分けられる。

墳丘を利用した例は、数例挙げられるが、埋葬施設を利用したものは数少ない。墳丘利用例は、蔵骨器を使った埋葬例と経塚を営んだものなど挙げられる。経塚は森内氏が集成されているが、⁽⁴⁾出石郡出石町田多地をはじめ多紀郡丹南町西山北など数例知られている。埋葬に伴う利用は、朝来郡和田山町筒江中山23号墳に代表されるように墳丘に埋葬施設を築いている。墳丘そのものではないが、古墳の立地する地形にも墳墓が築かれている例がある。三田市木西の八木ノ谷1・2号墳前の中世墓が⁽⁶⁾そうで、古墳を意識していたとは断言出来ない。また、豊岡市中ノ郷深谷1号墳⁽⁷⁾でも墳丘上に礎を伴った中世墓が築かれている。

墳丘利用例も数例知られるが、横穴式石室の利用はより多く見られる。埋葬施設そのものの再利用ゆえに埋葬に使用したケースが多いようである。その顕著なものとして、龍子長山1号

墳と同地域の揖西平野北縁に位置する西宮山古墳⁽⁸⁾がある。北宋銭・明銭とともに人骨が出土している。玄室で9体、羨道で2体の人骨が確認されており、明確な埋葬例として指摘出来る。石室内から蔵骨器が出土し、同様な埋葬例として考えられるものに神戸市舞子古墳群東市ヶ坂1号墳⁽⁹⁾、加東郡滝野町四ツ辻5号墳⁽¹⁰⁾、同黒石山10・11号墳⁽¹¹⁾、多紀郡丹南町庄境2号墳⁽¹²⁾が挙げられる。

それ以外で積極的に石室再利用の性格は究明出来ないが、石室を使用した形跡を残すものも多々ある。龍子長山1号墳のように石室内に面をなすように集中して出土するものや数片の後世の土器片が出土するものまで多数ある。遺構と言えるように集中して出土した古墳は加西市鎮岩町開キ1号墳⁽¹³⁾、西脇市野村町蔵谷・高松26号墳⁽¹⁴⁾がある。他に土器量は少ないが、炉と思われる土坑を伴う宝塚市旭ヶ丘2号墳⁽¹⁵⁾や近世墓が石室内に営まれた三田市末野、双子塚2号墳⁽¹⁶⁾などがあるが、時期的には下るものである。

また、宝塚市白鳥塚や西脇市狐塚のように信仰の対象となった石室も一種の石室再利用と言えよう。

若干の遺物を出土する古墳は多数あるが、再利用の性格を理解出来るものは僅かである。龍子長山1号墳も焼土・炭を伴った舟底状土坑に9個体の土器を置いた状態で検出され、しかも土器の中には緑釉を含んでいた。火を使用し、土器を置いたことは知り得るが、性格までは言及出来ない。骨片が全く見られないことや余り深くない舟底状の土坑の状況からは埋葬に伴うものとは思われない。

近接する龍子向イ山古墳群⁽¹⁷⁾でも4基の古墳を調査したが、群中で最も規模の大きな1号墳だけ後世の土器が確認された。1号墳は最も下方に存在し、集落から近いという理由も考えられるが、墳丘・石室規模の大きさから再利用の理由と考えたい。同様の傾向は、前述した西宮山古墳や西脇市高松26号墳にも見られる。

龍子長山1号墳が再利用された要因は石室規模にあると考えたが、それ以上に再利用者が使用した意図が問題となろう。再利用の性格は明言出来ないが、火を使った所作を行っている事実から、火を使用した祭祀を行ったものと考えられる。石室にて祭祀を行うのは祖先崇拜がまず考えられるが、それ以上に政治的な示威的行動であるような気がする。古墳を祭祀の対象とすることによる政治的意図が認められるのではなからうか。

註

- (1) 間壁聖子「八・九世紀の古墳再利用について」『水野崧一郎先生 頌寿記念 日本宗教社会史 論叢』1982.11 国書刊行会
- (2) 直宮憲一・坂井秀弥「長尾山の古墳群調査集報」1980.3 宝塚市教育委員会
- (3) 蔵骨器を使用する埋葬例として、神戸市五色塚古墳、芦屋市八十塚古墳群28号墳、姫路市宮山古墳などが挙げられる。
- (4) 森内秀造「兵庫県内主要経塚一覧」『兵庫県史18』1981.9 兵庫県史編纂室
- (5) 小川良太・岡田章一氏教示。1978年県教委調査。墳頂を再利用して灰輪・緑釉耳杯・土師器碗を伴った土坑墓が4基検出されている。他に神戸市五色塚古墳、高砂市大日山古墳、姫路市宮山古墳など

で蔵骨器の出土が知られている。

- (6) 吉田 昇・岡田章一「AW-59・60(古墳)調査概要」『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報』 1978.3 調査時は青野ダム関係の遺跡として地区名を冠した通し番号を遺跡名としたが、調査報告書にあたっては小字名を使用し各遺跡・古墳名を与えるため、それが判っている現時点では、八木ノ谷1・2号墳を使用した。
- (7) 深谷古墳群現地説明会資料 中筋公民館・豊岡市教育委員会 1983.5
- (8) 武藤 誠「西宮山古墳発掘調査略報」『論叢』 1956.12 関西学院大学
八賀 晋「富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物」 1982.9 京都国立博物館
- (9) 「地下に眠る神戸の歴史展」 1980.11 神戸市立考古館 渡辺伸行氏教示。【石室内から鉄製品1点とともに蔵骨器が出土している。
- (10) 細川和明・森下大輔氏教示。土鍋4個体が石室から出土している。
- (11) 深井明比古・森下大輔氏教示。10号墳は石室内で火を焚いており、側壁が焼けている。土鍋1個体とともに柄3個が出土しており、12C～13Cの時期である。11号墳もほぼ同時代で土鍋が2個体出土している。
- (12) 輪老拓治・吉田 昇「近畿自動車道関保埋蔵文化財調査報告」(1)一庄境2号墳— 1983.3 兵庫県教育委員会
- (13) 西口和彦・立花 聡氏教示。
- (14) 北野純平・細川和明「原始古代の西脇地方」『西脇市史本編』 1983.3 西脇市役所
全長8.5mと西脇市内では大形の石室で構造的に秀逸な石室を利用してあり、須恵器碗が5個体出土している。
- (15) 武藤 誠・橋本 久「考古編」『宝塚市史第4巻』 1977.12 宝塚市
瓦器片が出土している。
- (16) 榎本誠一・渡辺 昇「三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報(3)」 1982.3 兵庫県教育委員会
- (17) 村上賢治・渡辺 昇「籠子向イ山」 1984.2 兵庫県教育委員会

2. 古墳時代の土器について

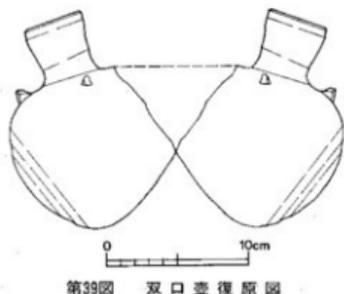
龍子長山1号墳より出土した土器のうち古墳時代に属するものは、須恵器18点・土師器4点を数える。そしてこれらの土器が出土位置より4つの群に大別出来る事は、先に述べた通りであるが、更にその内容について考えてみたい。

1) 第I群の土器

第I群に属する土器には、杯蓋(1~4)・杯身(6・8)・壺(13・14)・提瓶(15・16)・瓿(18)があり、いずれも須恵器である。杯蓋のうち(1・2)は破片であり、他の破片は両方とも同様な場所に散乱している。(4)はほぼ完形であるが、その場で破損している。これらはいずれも敷石が無いか、まばらな地点から出土している。一方(3)は敷石の上に乗っており完形である。杯身(6・8)を見ると、共に完形ではあるが(8)は敷石の間に挟まれており、(6)は敷石の上に乗っている。壺(13・14)では、(14)は敷石の間より出土しているのに対し、(13)は敷石の上に乗っている。瓿(18)も敷石の下にもぐり込むようにして出土している。以上の事により、第I群を二つに分ける事が可能である。一つは石室主軸より右側壁にかけて出土したもので、杯蓋(1・2・4)、杯身(8)、壺(13)、提瓶(15・16)、瓿(18)が属する。他方は左側壁側より出したもので、杯蓋(3)、杯身(6)、壺(14)が属する。前者は、破片のものが多く、敷石の間や下から出土しているのに対して後者は、ほぼ完形で、敷石の上に乗ったように出土している。そして前者は後者よりも先行する遺物であると考え事も可能であり、前者は追葬時に片付けられたものと考えられる。なお杯蓋(3)と杯身(6)は、その出土位置よりセットと考えられる。

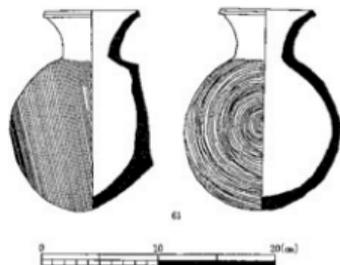
2) 第II群の土器

第II群の土器は双口壺(17)1点のみである。底部より上方へ広がりがながら直線的に延び丸い肩を持つ、いわば小型の長頸壺にでもするような胴部をしている。この胴部の上方を粘土板で塞ぎ、側面に孔をあけて口頸部を取り付けたもので、製作技法としては提瓶や平瓶と全く同じである。このように製作技法などから考えると(17)は完形の提瓶とするべきである。しかしその底部は、自然釉のため調整をうかがう事は出来ないが、面が均一でなく凸凹が見られる。また底部の周縁は鋭くがっており、見たところ何かが剝離した事は明らかである。そして剝離痕より、高台などという小さなものではなく、壺本体と同等あるいはそれ以上の大きなものが(17)に接合していたと推測される。



第39図 双口壺復原図

(17)の全面に自然釉が見られ、割離面にも自然釉が付着している事から、焼成前あるいは焼成中に割離したものである。自然釉は、頸部付近より流れて、口縁と反対側の胴部でたまり、頸部の周囲にある3個の突起と同様な突起を形成している。この自然釉の流れの方向から、焼成時における(17)の垂直方向を知る事が出来る。第25図の傾きはこのようにして求めたものである。更にこの図を反転復原したものが第39図である。果して(17)がこのような器の一部



第40図 丁古墳群の双口壺

であらうかとは定かでないが、現在のところ双口壺の想像図としておく。なお割離面を軸として図を反転復原した場合、口縁部が重複してしまう。

(17)の類例は、知り得た限りでは、姫路市勝原区に所在する丁古墳群より1点出土しているだけである。1965年の第3次調査で第3号墳より出土したもので、胴部にカキメを施している(第40図)。(17)よりも口縁の作り方が丁寧で、胴部最大径・底径・器高ともやや大きい。そして底部は、実測図を見た限りでは(17)と同様割離しているようである。丁古墳群第3次調査3号墳より出土した杯蓋は、天井部外面にやや退化した稜を持ち、口縁端部内面にも段を持っている。杯身は立ち上がりが長く、受部も斜めに延びている。また口径に対して器高も高い。いずれも龍子長山1号墳出土の杯蓋・杯身より明らかに古い様相を示している⁽²⁾。

3) 第三群の土器

第三群に属するのは、須恵器杯蓋(5)、杯身(9)、土師器杯(19)である。(5)と(9)と口径も小さく器高の高い点が共通しており、セットと考えられる。

4) 第四群の土器

第四群には、須恵器杯身(7)、壺(11・12)、土師器壺(20)、甕(21・22)が属する。(7)は破片であり、(7)の他の破片は第I群に属する杯蓋(1・2)の破片と同じ所から出土している。杯蓋(1・2)も破片である事から考えると、(7)も第I群に属したものと推測される。高杯(10)の破片の一部も第四群に属するが、(7)と同様の理由から第I群に含めて考える方が良いと思われる。

次に各群の土器の年代について考えてみると、第I群の2グループの須恵器杯・提瓶は中村編年のII型式5段階に属するものである。同一型式の範囲内で追葬が行われたものと考えられる。第II群の土器は双口壺のみで、時期を決定し難いが、製作技法から提瓶の製作された時代と考えられる。また口径部にある3個の突起を、提瓶に見られる把手の退化形態と考えるならば、やはりII型式5段階頃と考える事が出来よう。ただこう考えた場合、丁古墳群第3次調査

3号墳出土例の年代よりも新しくなるが、籠子長山1号墳の年代を双口壺1点だけで古くするのは無理ではないと思われる。第Ⅲ群出土のセットの杯は、第Ⅱ型式6段階に属するものである。また土師器杯も7世紀を前後する時期に求められるものである。第Ⅳ群の土器の中には細かく時期を限定出来るものは見られない。

以上、各土器の出土状況や型式などから考えると、籠子長山1号墳の築造年代は6世紀後半に求めるのが妥当であろう。そして7世紀初頭まで最低2回の追葬（第Ⅰ群の新しい様相を示すグループと第Ⅲ群）が行われたと考えられる。

註 (1) 『姫路丁古墳群』 東洋大学附属姫路高等学校 1966年
なお報告書の中では、平瓶とされている。

(2) 報告書では、3号墳の年代を5世紀末～6世紀初頭としている。

3. 石室再利用時の遺物について

龍子長山1号墳から出土した石室再利用時の土器は、19点を図示し得るのみで数少いが、ほぼ平安時代に属するものであり、このうち比較的時期を押えやすい杯、碗類についてみれば、大きく3つの時期のグループに分けることができる。すなわち、石室再利用時の土壇から出土した一群の土器を中心として、それに先行する9世紀前半代の須恵器高台付杯(1)、及びやや時期の降る土器群である。

土壇から出土した資料には須恵器杯(2、3)、碗(4、5)、土師器碗(10、13、14)、甕(17~19)、緑釉陶器皿(8)がある。4は、高台が高く安定し、側面をていねいに整えており、5も高台の径が大きく体部が直線的であるなど、糸切り碗のうちでも比較的古い段階の特徴をもっている。また3の体部も4とよく似たプロポーションで、成形手法の上でも共通したのもをもっており、ほぼ同様の時期におくことができる。従来の見解に従えば、ほぼ10世紀後半を前後する年代に属するものであろう。13、14については、須恵器碗と全く類似した形態、成形手法を示し、酸化炎焼成か還元炎焼成かの違いだけと言ってよい程で、その編年上の位置付けは須恵器に準じて考えることができよう。ただ、13は糸切り、14はヘラ切りと、底部切り離し手法に違いをみせており、糸切り底が出現する過渡期のものと考えられる。須恵器の平高台碗における底部切り離し手法については、ヘラ切り碗を焼成している窯址に、相生市西後明7号窯、三田市青野ダムA E86窯址や加古川市札馬5号窯址などがあり、ヘラ切り碗が糸切り碗に先行するという考え方が一般的であるが、森内秀造氏は必ずしも両手法の碗が前後関係にならない可能性を指摘しており、氏の意見に従えば⁽⁴⁾13、14については、土壇資料の一括性を重視して、須恵器3~5と同様の年代を与えることができるのではなからうか。

6、7は、上記の碗類に比べて高台径が6cm前後と小さくつくりも雑で、明らかに時期の降る資料である。体部は成形時の凹凸が激しく、口縁部に重ね焼きの痕跡を残し、全体に淡灰色を呈して焼成も甘い。これらは時期差を反映したものかもしれない。体部、高台のつくりなどは龍野市大陣原1号、3号窯の製品に通じるものを持ち、ほぼ同時期の所産であろう。あるいは⁽⁶⁾2などもこのグループに含めてよいのかもしれない。

以上、土壇出土の土器群を一括遺物として、比較的短期間のうちに製作せられたものと考えてきた。しかし、糸切り碗の出現時期やヘラ切り碗の位置づけなど未解決の問題が多く、類例の増加をまって再検討したい。また龍子長山1号墳出土の須恵器杯・碗については、近くに相生古窯址群をひかえており、古窯址群のいずれかの窯から供給されたものであることはほぼまちがいがなく、同古窯址群周辺の消費地における類例の一つとして活用できるであろう。⁽⁷⁾

次に、杯、碗類の成形手法について気づいた点を1・2点記しておきたい。須恵器碗5は口縁部上端の1ヶ所に段を有する(図版23)。これは粘土紐巻き上げの最終段階の継ぎ目がよく消されずに残ったものと考えられる。この時期のロクロの構造や成形技法などは必ずしも明らかでなく、ロクロ一本挽き技法の開始時期についても意見の一致をみているわけではないが、

本資料は少くともこの段階までは、小形の器種についても粘土紐巻き上げ手法が残っていたことを示すものである。また、須恵器杯3、碗4においては、外底部に板目状圧痕がみられる。板目状圧痕は、主に内底部のナデにより生じたもので、強く内底部をナデることにより底部の脆弱さを補ったと考えられており、太宰府周辺では8世紀後半の須恵器杯、皿の一部と9世紀前半以降の土師器杯、皿のほとんどにみられるという⁽⁸⁾。本例においても板目状圧痕と内底部のナデの方向は一致しており、両者の間に強い関連性が認められる。この点について、今後当地方の須恵器の形態、技法の変遷をみていく上で注意していく必要がある。

註

- (1) 森内秀造「兵庫県相生古窯址群について」『日本史論叢』第10輯 1983
- (2) 吉田 昇「AE-86(窯跡)調査概要」『三田市・宍野ダム建設に伴う歴史文化財調査概報』兵庫県教育委員会 1978
- (3) 中村 油他「礼馬古窯群発掘調査報告書」加古川市教育委員会 1982
- (4) 例えば中村氏は註(3)報文中において、5号窯からは両手法、7号窯からは糸切り碗のみが検出されていることから5号窯に古い要素を認めている。両窯の糸切り碗の形態を比べれば5号窯に古い特徴が見られ、このことに、ヘラ切り碗をさかのぼらせる理由を求めることができる。
- (5) 前掲註(1)
- (6) 種定淳介「大陣原古窯址群」『昭和55年度兵庫県歴史文化財調査年報』兵庫県教育委員会 1982
- (7) 本墳から約400m離れた龍子向イ山1号墳からも相生窯の須恵器碗が出土している。「龍子向イ山」兵庫県教育委員会 1984
- (8) 森田 勉「太宰府出土の土師器に関する覚え書き(2)」『九州歴史資料館研究論集3』 1977
同 「太宰府の出土品③——土器・陶磁器」『佛教芸術』146号 1983

Ⅶ お わ り に

龍子長山1号墳の調査は、盆の終わった残暑の残る8月23日から新年早々の粉雪が舞う1月10日までの期間行われた。夏から冬までの3つの季節の間調査を実施したことになる。調査時は、暑さ寒さに即応して気候に不満を感じたが、今年度の酷暑厳寒と比べると雲泥の差である。秋雨前線にも左右されず、作業は順調に進んだ。毎日、作業の行き帰りに通った小池中池の堤の板が調査中に2度も狂い咲きするなど気象変化が激しかった異常気象も調査の進捗状況には有益な方向へと働いた。

調査に着手するに際して、調査対象地頂上へ上ると西側には龍野西インターチェンジが目前に見られ、供用開始した山陽自動車道を走る車を見、車の排気音と長山丘陵直前まで出来上った道路の塵脚が眼前に迫り、気分的に急がされたものがあった。

調査が無事終了したのは、日本道路公団姫路工事事務所の南工務課長、横手庶務課長、工藤庶務課長をはじめ日本道路公団・県教育委員会の担当の方々や龍野市教育委員会をはじめとする関係諸機関の御尽力によるものである。謝意を表したい。また、発掘調査・整理調査に携わって戴いた方々に感謝するとともに、調査期間中事故もなく恙なく調査を終了出来たことを喜びとしたい。

調査は、龍子向イ山古墳群と一部併行して実施した。また、同時期に土砂採取に伴って鳥坂古墳群も調査された。1982年4月龍子に事務所を設け、山陽自動車道の調査に着手してから翌年2月初旬にかけてのほぼ1年龍子近辺で調査の鉞が振るわれていたことになる。特に8月末から9月にかけては、3古墳群が調査されていたことになる。龍子という1つの大字内で同時期にしかも合計9基の古墳が調査されるということは稀有のことであろう。調査結果から少しでも多くの事実を抽出し、歴史的・地域的な事実を引き出すことが調査者の責務であろうが、力量不足のためその努めを果たせなかった。将来、公刊される「龍子向イ山」の報告書に期したいと思っている。龍子向イ山の概報と本書によって、多くの事実を引き出して戴ければ幸いである。本報告書の利用を願うとともに御教示賜りますようお願い致します。



播西平野と古墳遠景（北東から）



岡上（北から）



古墳全景 (調査前)



石室全景



石室全景



墳丘断面



墳丘断面



土層埋納状況





航空写真



古墳遠景



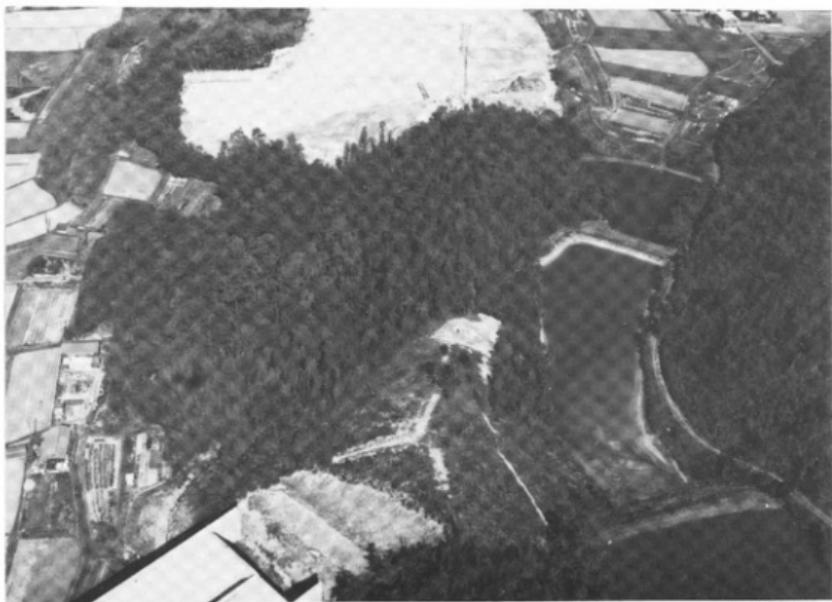
古墳遠景（南西から）



古墳遠景（北東から）



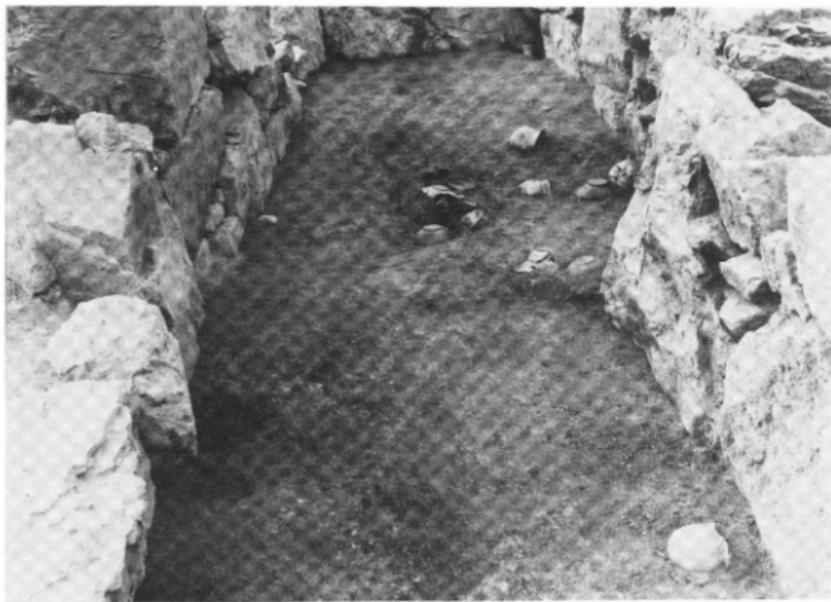
古墳遠景（北西から）



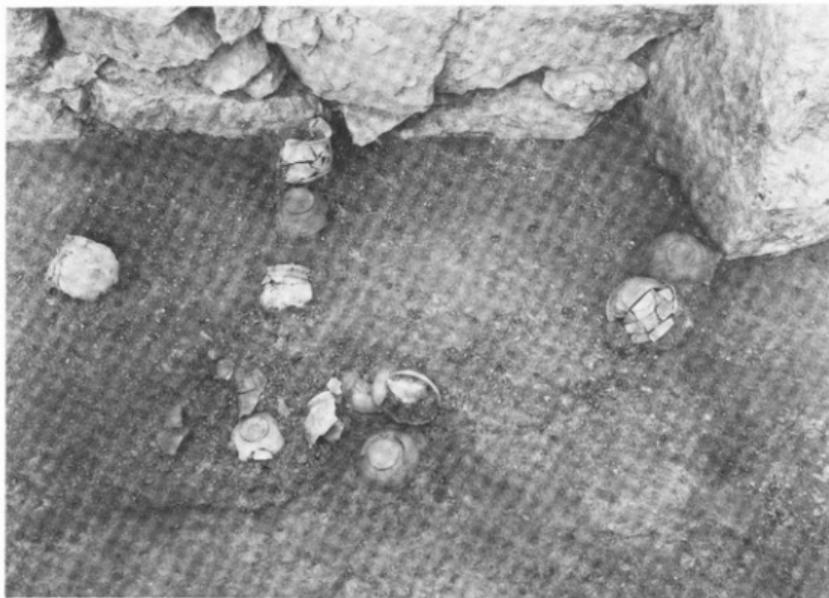
古墳遠景（西から）



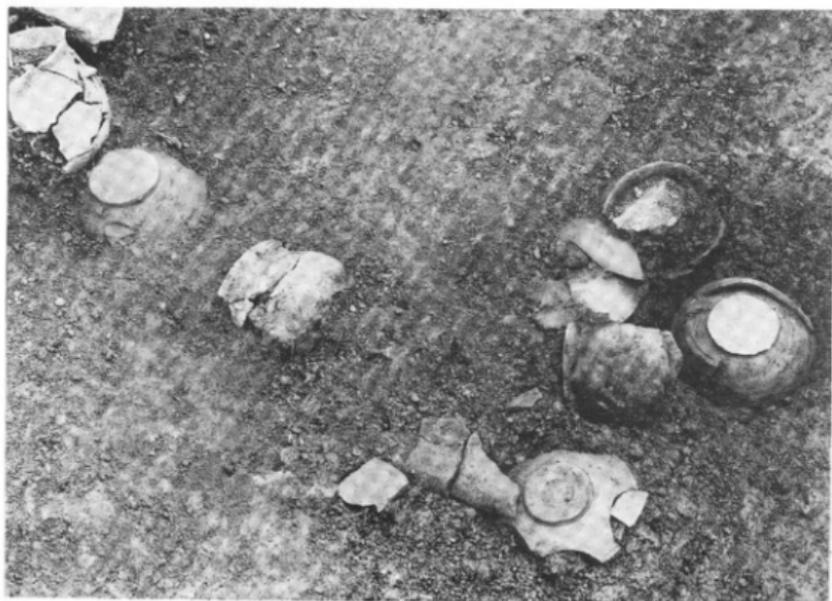
古墳全景（調査前）



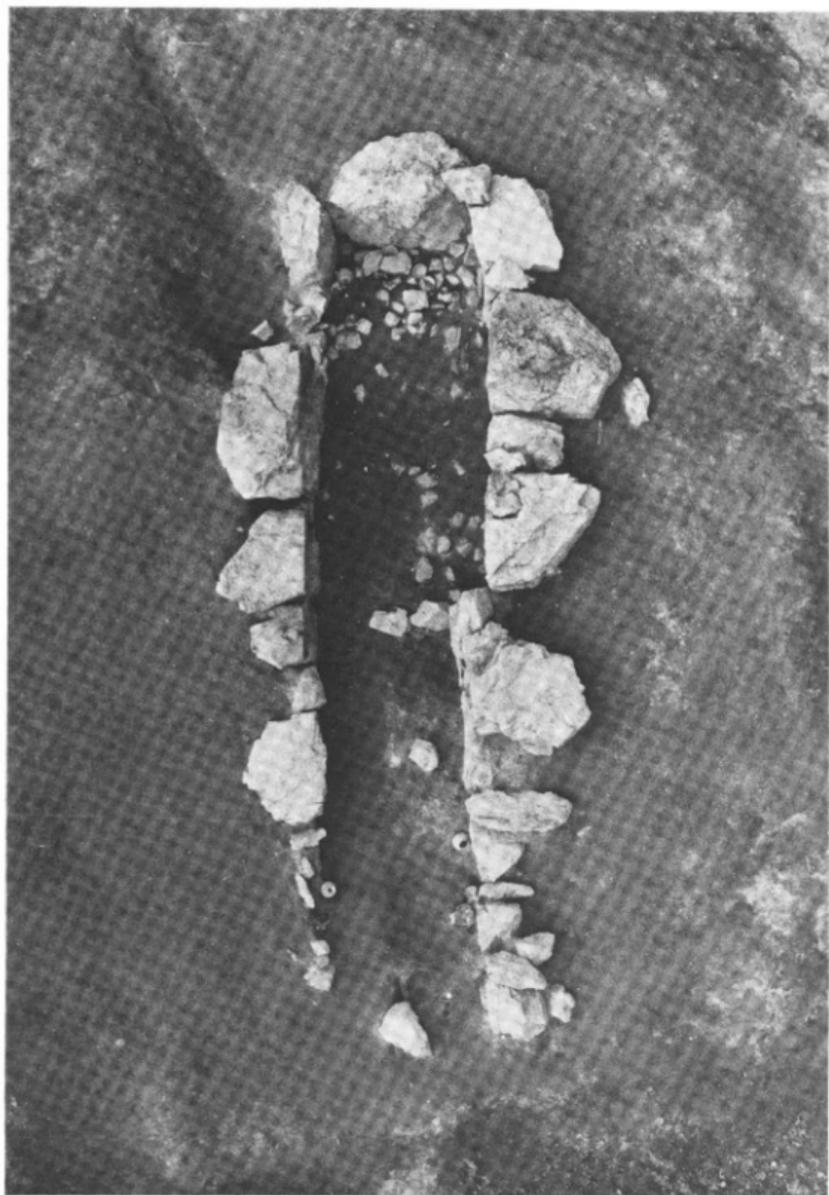
石室再利用面全景



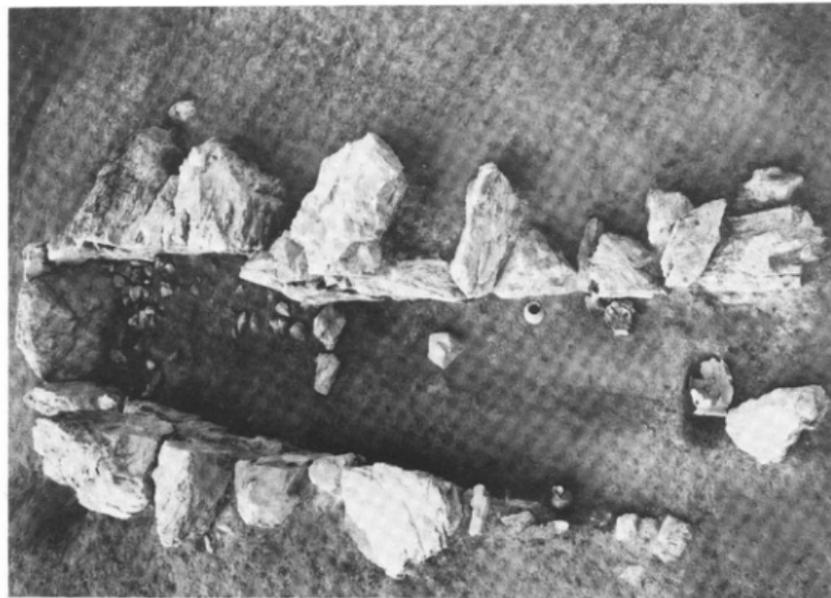
石室再利用面遺物出土狀態



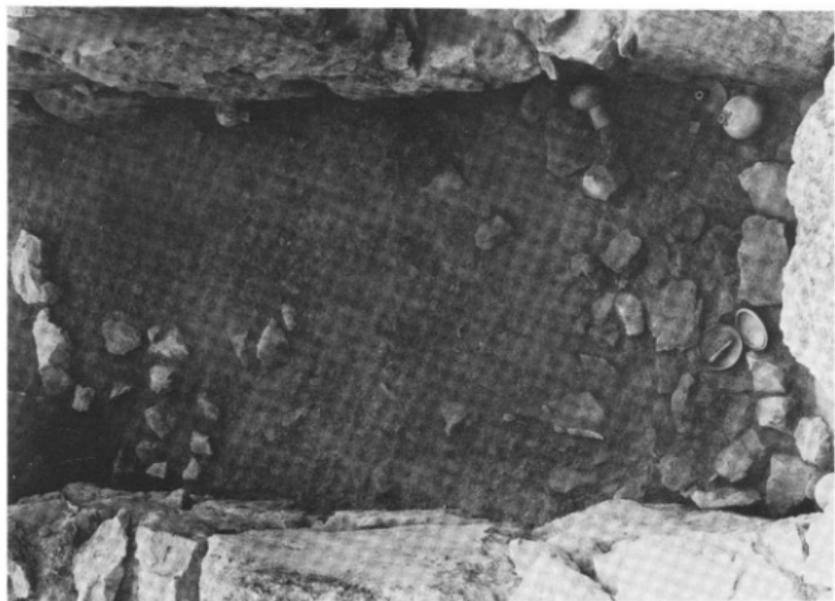
同上



石室全景(約 $\frac{1}{60}$)



石室全景



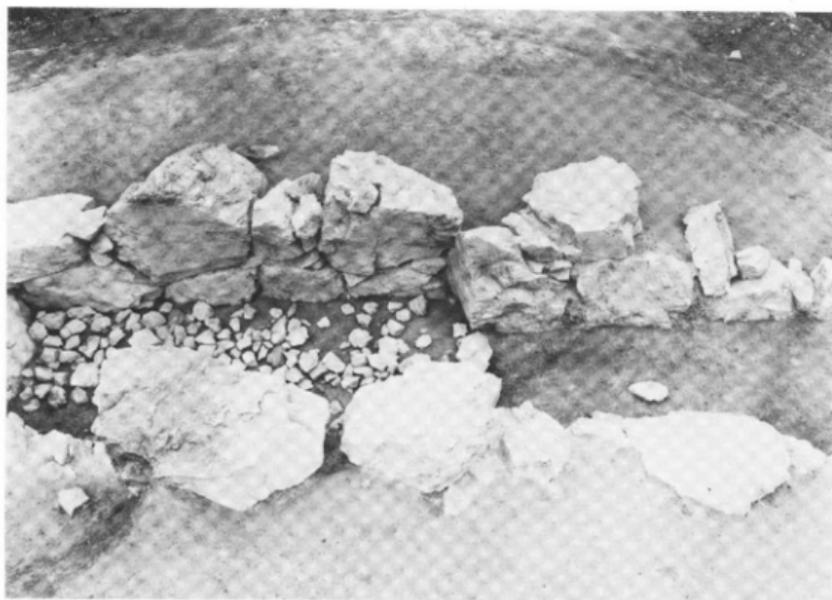
女室全景



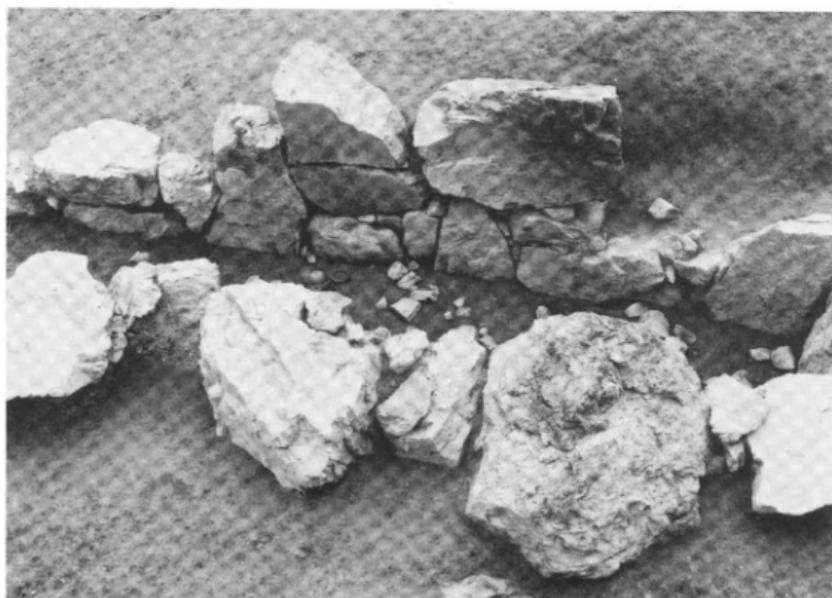
石室全景



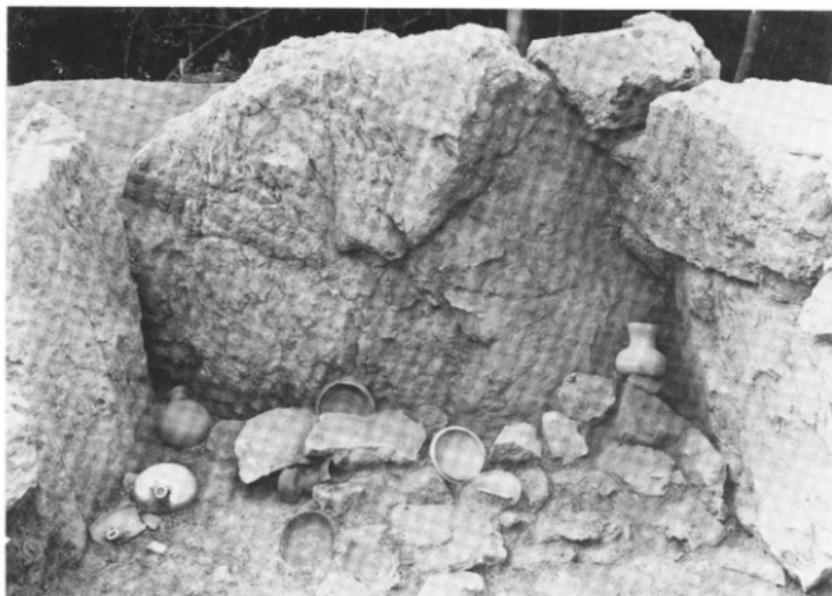
同上



左(北)側壁



右(南)側壁



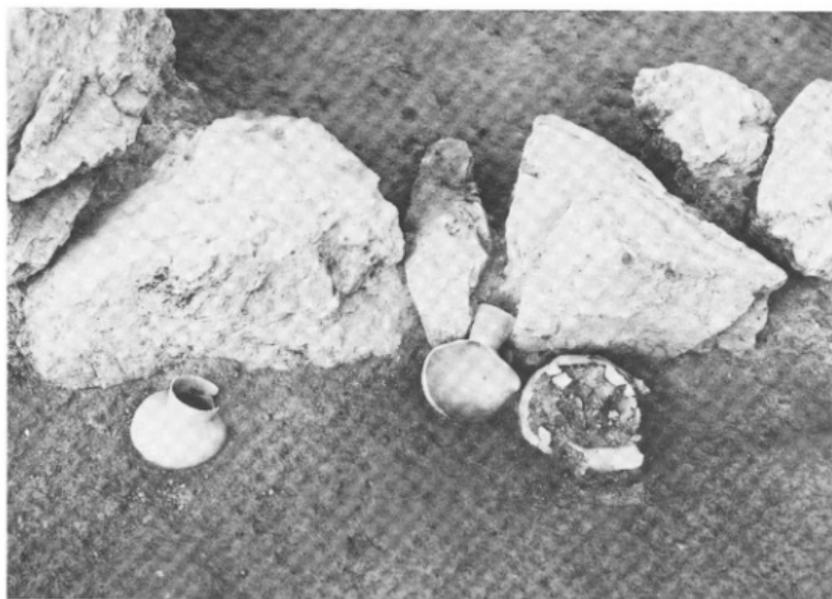
奥壁



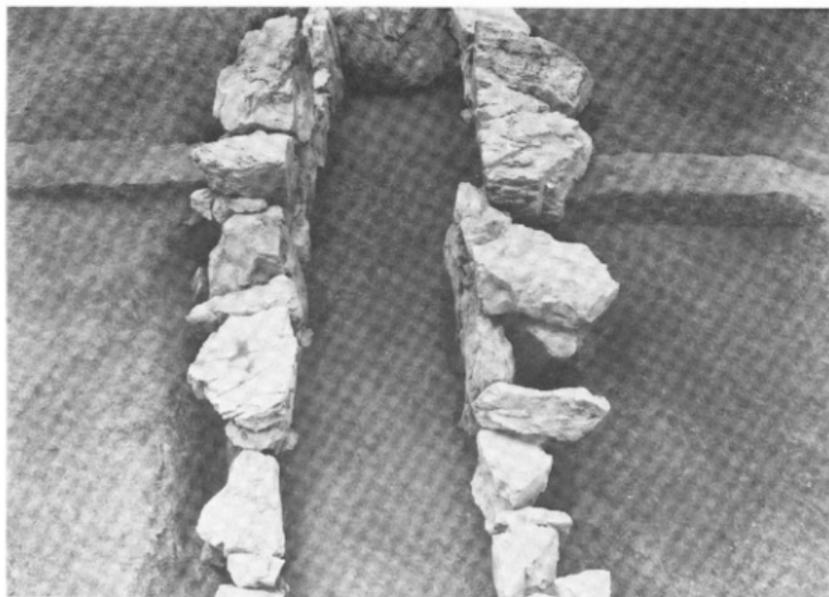
遺物出土状態



遺物出土状態



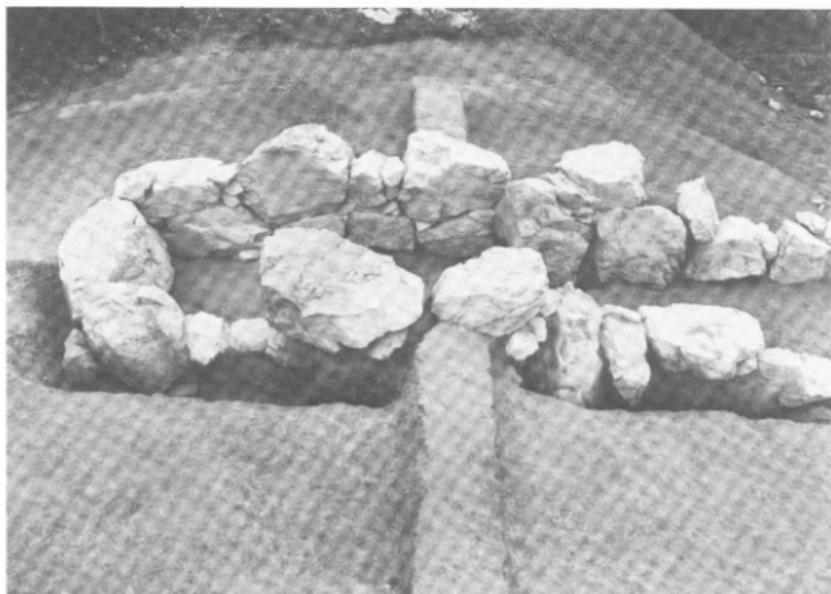
同上



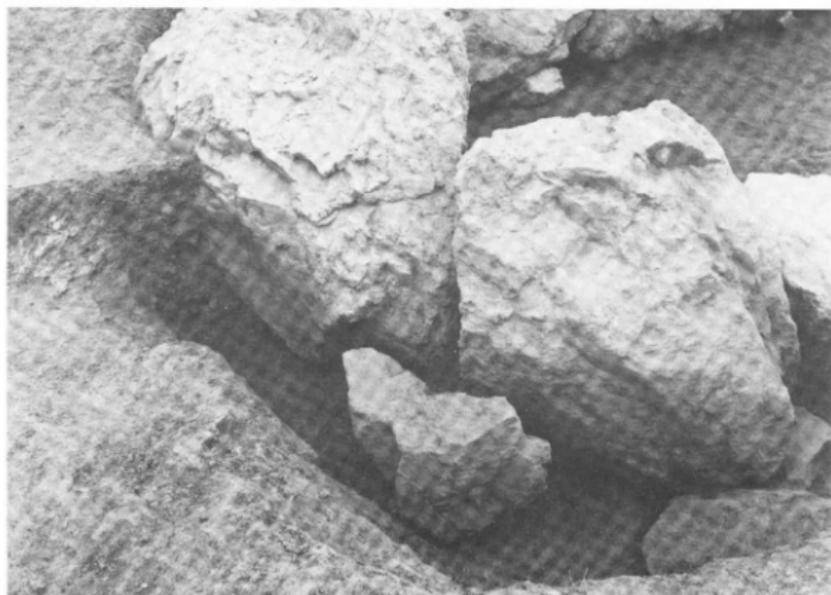
石室全景



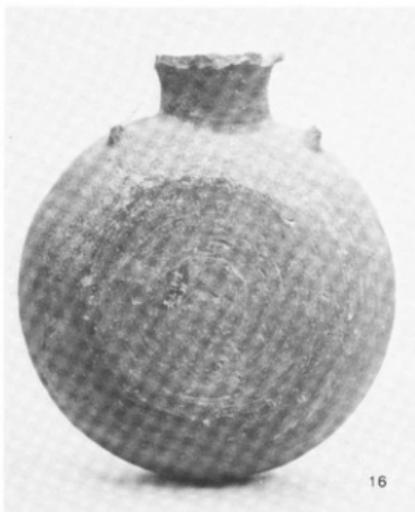
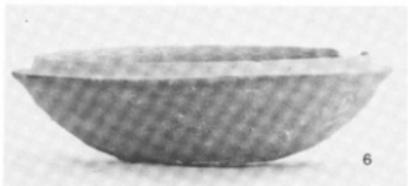
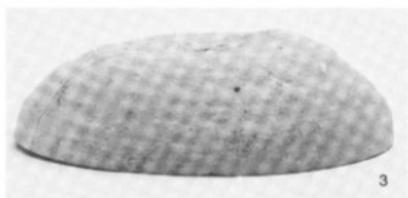
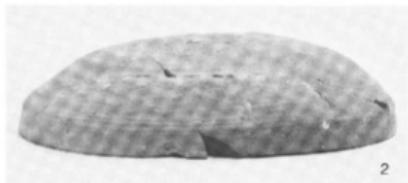
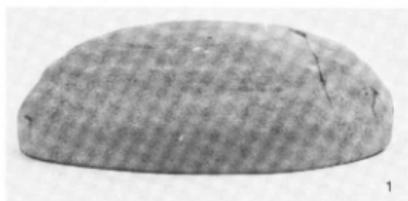
同上

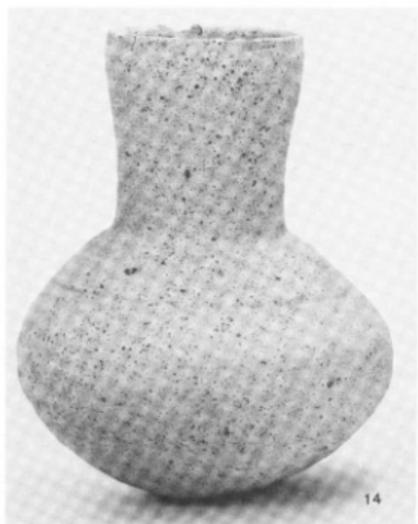
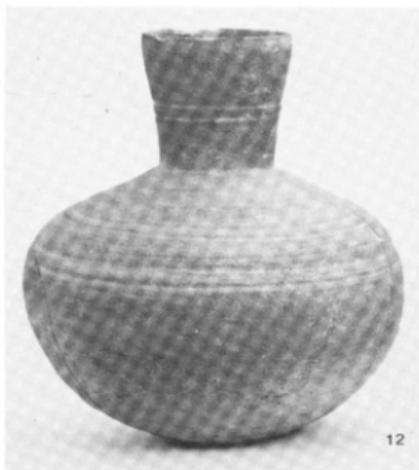
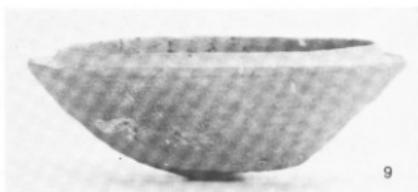


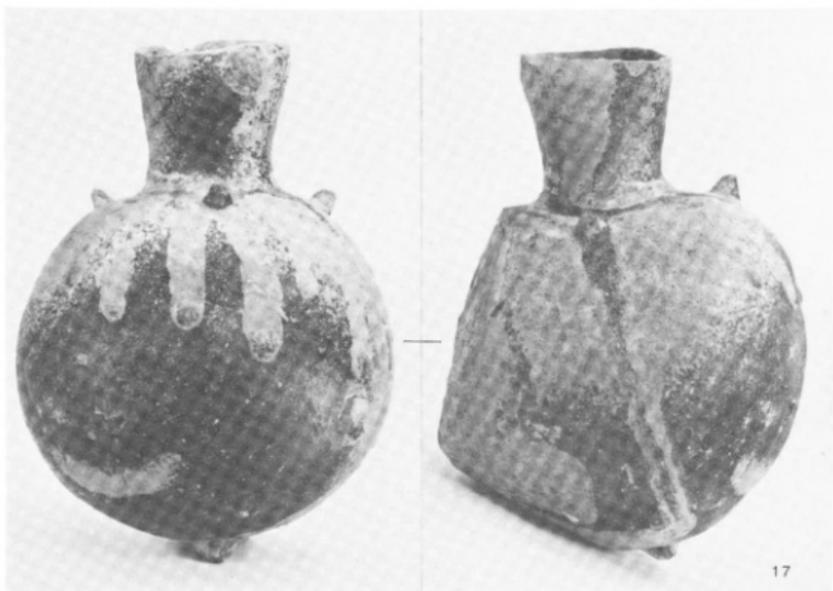
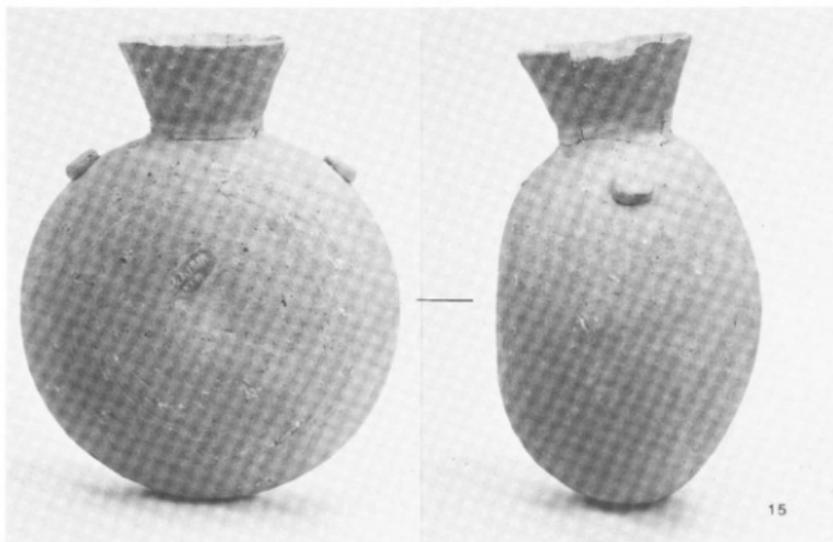
石室全景



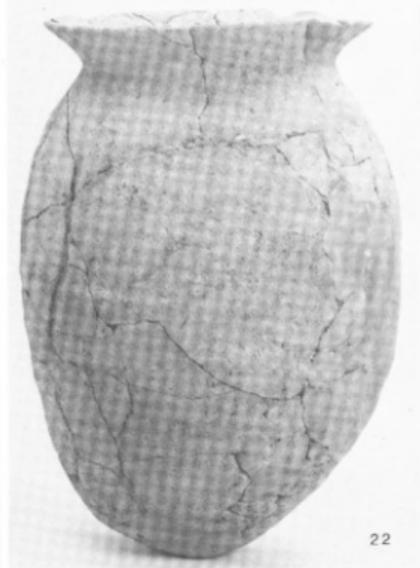
墓壇の裏込め状況





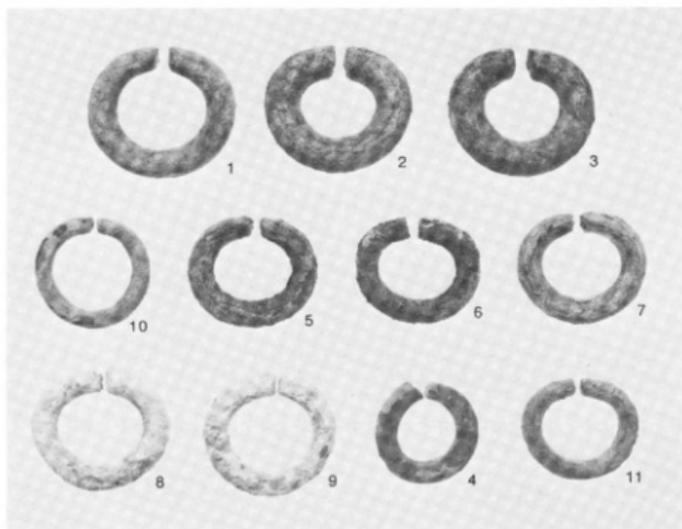


古墳時代出土土器

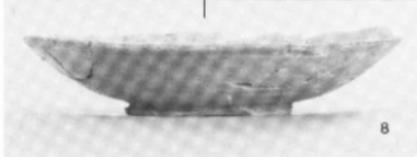
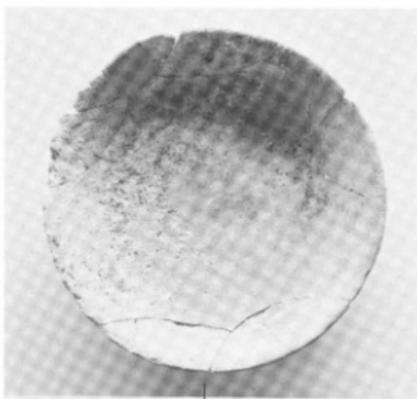
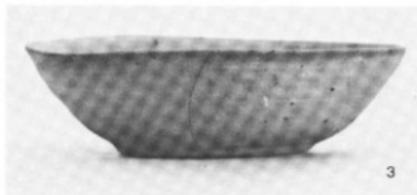
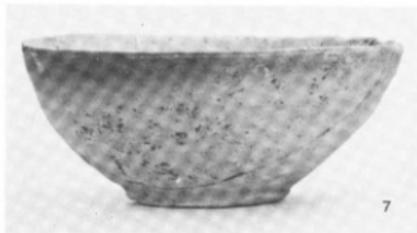
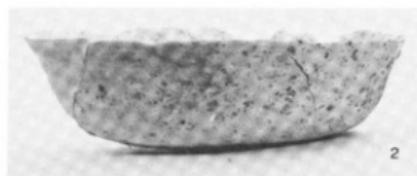
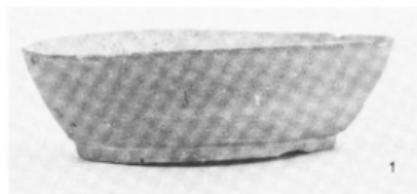




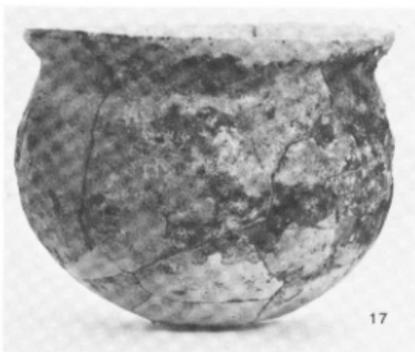
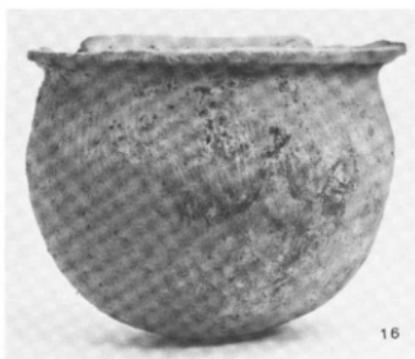
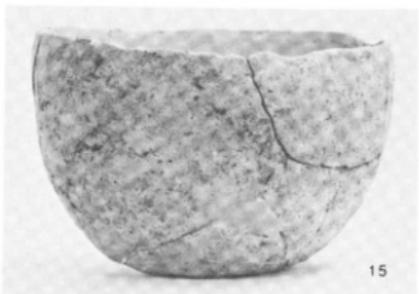
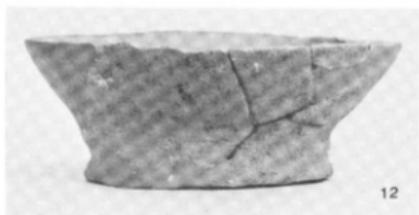
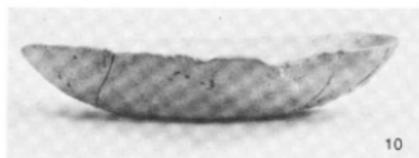
古墳時代出土鉄器



古墳時代出土耳環



石室再利用時出土土器



石室再利用時出土土器

兵庫県文化財調査報告書 第23冊

1984年3月31日 発行

龍子長山1号墳

—山陽自動車道関孫埋蔵文化財調査報告Ⅱ—

編集 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

発行 兵庫県教育委員会

〒650神戸市中央区下山手通5丁目10-1

TEL 078 (341) 7711

印刷 株式会社 精 文 舎

〒652神戸市兵庫区下沢通6丁目2-18

TEL 078 (575) 4729
